

・  
名を与えられた意味は  
死んだ意味だ

ロラン・バルト

一九七〇年、二月四日、正午。

朝山善吉は、旅館〈かわらや〉の岩風呂のなかにいる。  
やんだ雪はぶりかえす気配はなく、ガラス窓をすかして、虹色の陽光がさしこんでいる。

数羽の雀のなきごえもきこえる。

季節がまだ冬であることを、善吉はわすれている。

父親の朝山完吉が殺されたことも、まだ知らない。

死を決意した直後から、自然がかぎりなく美しく見えてしかたがなかった。

いわゆる『末期の眼』なのだろうとかがえたが、もしかすると自然はもともと美しく、見ていた自分の眼がくもっていたのかもしれないとおもわれた。

善吉は、湯船のなかでながながと手足をのぼし、縁にぼんのくぼをつけて天井をあおぎながら、好きな詩を大声をあげて詠んだ。

《太陽は美しく輝き

あるいは太陽の美しく輝くことを希い

手をかたくくみあわせ

しずかに私たちは歩いて行った

かく誘うものの何であろうとも

私たちの内の

誘わるる清らかさを私は信じる》

「伊東静雄、日本の詩神ね」

善吉がふりあおぐと、湯煙のなかに、松本大海の筋肉隆々の全裸がある。

「だが危険な詩だ、伊東の詩の透明感は、自分たちを死の世界へと誘うかのようだ。

デュルケームではないが、『自殺誘発電流』がどの詩にもながれている」

うそぶくふうにいいながら、大海は湯船に尻からとびこんできた。

「乱暴だね、大海は言行一致やね」

「皮肉か、善吉も言行一致だな。

皮と肉だけの肉体を、この世のなごりに見られるのはうれしいかぎりさ」

「この貧しい肉体こそ、自然なのだ、《自然は限りなく美しく 永久に住民は貧窮していた》。

大海の肉体はまったくのつくりものやないか、まるで三島由紀夫や、空疎な小説と滑稽な肉体」

「愛している者の他は、あの人のことを云々してはいけない」

「悲喜劇的ヒロイズムの思想と肉体は、役立たずといたいだけなんや」

「なんとでもいえ、この肉体が必要になる季節が、すぐそこにきているんだ。

いいかい善吉、太陽の輝き、鳥の声なんてものは、仮象さ」

「仮象こそ實在」

「禅坊主みたいなこというなよ。

尤もちかぢか坊主が要る」

「ほんまに殺るんかい」

「あたりまえだ」

「だれを」

「へっぼこ私立探偵、舟木英介」

「どうしてや」

「やめろ、刑事じゃあるまいし。

善吉よ、そんな言い方するところをみると、やっぱり裏切ったな」

「そうやない、けれどもぼくは、殺す相手がいなくなってしまったんだよ」

困惑の表情をうかべた善吉は、なにもかも喋ってしまいたい気分だった。

大海にむかってではなく、独り言でもよかった。

そうして、できれば、このまま、この湯のなかで、溺死したかった。

「ところがわりというやつか」

「いんや、ほんまに文字通り、いなくなってしまったんや。

大海だって、かんづいていたやろ、ぼくは母を殺そうとしていた、ぼくを捨て、ぼくの父を捨てた母をね。

うらんでいたわけやない、ということは、ぼくは母を殺すことで、母との関係をつくりたかったのかもしれない。

フロイトやユングなら、うまい解釈をするやろな、マザーコンプレックスというより、ファーザーコンプレックスのほうかな。

ぼくにはほんまに、父をだしぬこうとする、執念深い気持があった。

こういってしまえば簡単な話やが、ぼくの精神は荒んでいた。

それでもぼくは、殺人とその後の自殺を、みずから選びとる蛮勇によって、地獄から解放された。

ぼくは、これほどの自由をあじわったことがない、そして、自然が美しい。ところがや、ようやく探しあてた母は、すでに十年前に死んでいたんだ。しかもや、母は父とぼくの写真を懐中にいれて、海中に身をなげたんや。まるで下手な洒落のようやないか。

殺す相手がなくなったというのは、そういうことなんや」

「そうか、それは気の毒だ。

それなら裏切りとはいえない。

しかし殺人はやめても自殺の意志のほうは、かわっていないんだろうね」

「むろんや、といたいけれども、ここ三日ばかり、ところがわれている。

ぼくはソクラテスでもプラトンでもないから、人間が神の所有物だなんてかんがえない。

けれども人間は自然の一部なんだなあって、あたりまえのことをつくづくおもうんや。

だから人間は自然に生き、自然に死ぬのがいちばんなのやと」

「そういう心境になったきっかけは、やはり母親の自殺かい」

「それがそうでもなくて、あの男の声をきいたせいらしい」

「あの男って、どの男さ」

「さっき話したやんか、麻暮正作。

あの黒い炎はいったいなにが火種になっているんだろう、まるで暗黒の宇宙のエネルギーを体現している。

あれも生命や、あんな生き方もあるんやなあ、あれはほんま、死の誘惑を断ちきっている力や、あるいは死の誘惑を糧として生きつづけている力や。

見るべきものはすべて見た、知るべきものはすべて知った、きくべきものはすべてきいた、そう信じこんで『見者』を自認していたぼくには、麻暮の声は衝撃的だった。

あの男はただの私立探偵なんぞではない、鬼でも蛇でも、おそれはしないぼくも、暗黒の宇宙の果てからきこえてくる、あの不気味な声には動転したものや」

「声だけだろ、といたいのが、わかる気がする。

もし自分が、麻暮正作と、十年前でなく、いま現在会ったなら、もっとおおきな衝撃をうけていたかもしれない」

「ぼくたちは、いやぼくは、どこかで、まちがえたんやろうか」

「自分たちは、いわゆるベビーブームの時代に生まれた。

受験戦争を勝ち抜いて、善吉は京大、自分は東大にはいった。

それから善吉は演劇に情熱をそそぎ、自分はエレキとロックに夢中になった。

同時に善吉は合気道、自分は空手。

恥ずかしながら、社会主義の実現を夢想して運動した季節もあった、社会主義が実現すれば、貧困も自殺も消滅すると信じて。

そして最近はおたがい、殺人と自殺に全知全能をかたむけてきた。

かつて自分たちはライバルだったが、いまや同胞だ。

自分たちはまちがってはいないよ、そうあゆんできただけだ」

「すまんね、気をつかわせて。

しかしぼくは、いやぼくたちは、偉大な父をもってしまった。

生まれたときから、まちがっていたんや」

断言して、善吉は湯船からでた。

その紅潮した美味しそうな背中に、大海が声をかけても、善吉はふりむかずにいってしまった。

四日、午後十二時半。

舟木英介は〈かわらや〉にもどっている。

〈朝山完吉殺害事件〉の「第一発見者」ということで、山風刑事に促されて、京都府警に寄った。

形式的な事情聴取をされ、連絡先を克明に記してかえされたのだが、待たされたわずかの時間で、山内参三宛の報告書を書いた。

とても電話をする気持になれなかった。

舟木の疲労を気づかってくれたのか、速達は山風刑事が請け負ってくれた。

まだ悪夢からさめない気分で、朝山完吉の遺品の整理をしようか、とりあえず岩風呂にはいろうかと、おもいあぐねて突っただけだと、そこに朝山善吉がやってきた。

「失礼します、舟木英介さんですね」

爽やかな声をかけられて、ようやく悪夢からさめたかんじがした。

「はい、そうです」

「ぼくは朝山善吉、父の朝山完吉に会いにきたのです」

善吉が丁重に挨拶をするので、舟木には憐れみの感情が先にきた。

こまかいことはとてもいえなかった。

「善吉さん、すぐに京都府警にいきなさい、お父さんに大変なことがおこったんです。

山風刑事にたずねるといい」

それでも善吉は、舟木が予想していた以上の動揺は見せなかった。

「そうですか、父がお世話になりました」

うなだれたのみだった。

「世話になったのはこちらのほうです」

「父は、朝山完吉は、殺されたんですね」

うなだれたまま、善吉はきいた。

「お気の毒ですが、それ以上のことは僕の口からはいえそうにありません」

「わかりました、ぼくは父の荷物をかたづけてから、京都府警にむかいます」

「まことに、ご愁傷さまです」

舟木はふかく一礼した。

善吉は顔をあげて、

「舟木さん、あなたもここには危険です」

「どうしてですか」

「すみません、ぼくにもそれしかいえません」

「わかりました、でもぼくが危険なのは日常茶飯事ですから、慣れてますので」

舟木は岩風呂にいこうときめた。

四日、午後一時。

松本大海はまだ岩風呂にいる。

さすがにのぼせてきたので、岩風呂の湯船の縁に腰をおろしている。

朝山善吉が先にでてしまったので、なんとなくおちつかなくなった大海は、『時には母のない子のように』という流行歌を口ずさみながら、ずっと川上真希のことをかんがえていたのだ。

真希のことをかんがえると、いつも胸がしめつけられ、不規則な動悸がした。

ふたつ年上の真希は、母であり姉であり、初恋のひとだった。

真希はおりにふれていったものだった。

『舟木さんは初恋のひとにすぎないわ』

けれども、いま初恋をしている大海にとって、真希の「初恋のひと」に、烈しく嫉妬せざるをえなかった。

ガラス戸をあけて、長身の男がはいつてきた。

湯気のなかでも大海には、(写真で見たことのある) 舟木英介だとわかった。

「こんにちは、しつれいしますよ」

といて、舟木は湯船にはいつてきた。

「はじめまして、舟木さん」

いささかふるえる声で、大海は応じた。

「おや、どうしてぼくの名を」

「有名な探偵さんですから」

「無名で有名なんですよ、ぼくは」

「日光にいったことがありますね」

「ええ、三年前かな」

真希といっしょだった。

「華巖の滝の前で、舟木さんは美人を横に、幸せそうな顔でした。

藤村操は、どんな顔をして、あの滝壺にとびこんだのでしょうかね」

「君はどなたですか、ぼくと真希の写真を見たんですね。

まさか、君は、松本大海」

おもわず舟木は、金剛力士に似た大海の肉体を見た。

おたがい全裸では、護身術も役にたちそうもない、と舟木にはおもわれた。

「そのまさかですよ、ここで会ったが百年目というやつです」

いうのと肉体がうごくのが、同時だった。

まるで肉体のなかに、意志が存在しているかのようだった。

大海は、太い両腕をのばして、舟木の首をつかんだ。

舟木の全身を、湯船のなかに沈めるのは、おもいのほか簡単だった。

舟木は両手両足を、バタフライを泳ぐ人みたいに、バタつかせたが、大海は両足もつかって、舟木のうごきをおさえた。

さすがに舟木も、湯をおしのけて二度三度と苦痛の顔をあげたが、抵抗はそれでおわった。

しばらくおさえつけていると、舟木の呼吸の泡がきえ、つよいケイレンを最後に、敵は人間ではなくなった。

大海が手をはなすと、力なくうつぶせになった舟木の裸体が、音もなく湯船の底に沈んだ。

人を殺すのが、これほどたやすいことだとは、おもっていなかった。

大海はあわてて岩風呂をとびでると、脱衣所も通りぬけ、玄関から全裸のまま逃走した。

(殺った、殺った、殺った)

と、頭のなかでなんども声がした。  
自分の声のはずだが、自分の声にはきこえなかった。  
(さあこんどは、どうやって自分を殺るかだ)  
という声もした。  
人通りのない雪どけの道をはしっていると、気づかずにはいられないことがあった。  
勃起しているのだ。  
真希から「初恋のひと」の存在を、はじめてきいて以来の、インポテンツ状態がおわったのだ。  
大海は、声をはなつて泣いた。

四日、午後一時十五分。

山風順一は、京都府警の一室で、花井健太からのメモをながめながら、手先の小林勘助の話をきいている。  
京都府警の殺人課の刑事は、みな嵯峨野の清水印刷にむかってしまい、建物全体がからっぽの印象。  
HONDA ナナハンを時速百キロ越えて、なん時間もはいらせてきたわりに、勘助はまったく疲れを見せなかった。  
自分の手柄話でも喋っているとしかおもわれない勘助に、業を煮やした山風がようやく渋い声をかける。  
「ごくろうだったな、そろそろ口にチャックをしろ、事件のあらまはわかった」  
そのとき婦人警官がはいってきて、山風に目くばせをただけで一枚の紙片をわたした。  
〈日刊スクープ〉の〈号外〉だった。  
超特大の大見出しに、山風はおもわずあごをひき、勘助は大口をひらいた。

《【死んだる団】高杉京平飛驒で自決》

そして小見出しには、  
《本紙記者驚異の大スクープの一部始終をここに記載する》  
とあった。  
かなり鮮明なモノクロ写真も、二枚載っていた。

焚火のむこうで睨みつけている高杉の鬼気迫る相貌と、焚火のなかにうつぶせに倒れこんだ高杉の死体。

記事は詳細で的確、両面を占め、最後に（小金井豊）の署名があった。

ながいあいだ山風は号外を読んでいたが、ようやく顔をあげると、おおきく息をはいた。

「高山で大臣を刺殺した高杉京平も、やはり【死んだる団】だったか。

新宿では爆死した藤上吾郎と、歌舞伎町猟奇殺人者の女、そして嵯峨野では『暗殺論』の朝山完吉殺しの辻中亀夫、このぶんではまだあらわれそうだな。

もしもこれらの事件が氷山の一角だとしたなら、日本国をゆるがしかねない。ともかくひとり逮捕する必要があるな。

高杉、藤上は死んでいるし、辻中は神出鬼没だから、そう、女だ、猟奇殺人の女を捕まえることだ」

独り言をおえて、山風刑事はつぶやきながら、勘助を上目づかいで凝視した。

「だんな、またあちきを、利用しようとしているね」

「利用ではない、活用だ。

だがこんどばかりは、危険な役目だ、すぐにいっしょに新宿にもどるぞ」

「なんだい、あちきには休暇というものがもらえないんか、充分お役目は果たしたつもりよ、あちきはこれから古都逍遥さ」

「おや、勘ちゃん、柄にもなく風流なこと、のんびり京都見物よりオートバイぶっとばすほうが、似合っているぜ」

「だんなは、あちきを誤解してるんだよ」

そういいながら勘助は、まんざらでもなさそうな顔つきで、乾いた唇をなめた。

（ちなみに朝山善吉が京都府警にやってきたのは、山風と勘助が出発した直後だった）

四日、一時半。

舟木英介は、全裸で岩風呂の脱衣所にうずくまっている。

ようやく息は正常になったが、肺に湯がはいって、ふかく呼吸すると、肺が笛になる。

仕事柄舟木は、過去にもなんどか危険な目にあってきたが、こんなに酷いことははじめてだった。

九死に一生をうるとは、まさにこういうことなのかとおもわれた。



もしあのとき死んだふりをしなければ、とおもうと慄然とした。

いやいくら機転をきかせても、演技がうまくても、松本大海があわてて逃げだしてくれなければ、いまは息をしていないにちがいない。

もしどうしても殺されなければならないとしても、こういう殺され方はごめんだ。

朝山完吉の殺され方が、理想的だとおもわれた。

大海にくらべれば、辻中亀夫は情のある男だとさえおもわれた。

舟木は、大海の半分ほどしかない二の腕の筋肉をさすりながら、  
(そろそろ潮時かな、商売替えをするにはいい時期だ)

と素直におもわれた。

(それにしても、どうしてぼくが殺されなければいけないのだろう、恋人をとられたのはこっちなのに。

大海は勝者のはずなのに)

憤慨しながらも舟木は、

「これも人生、これも人心だ」

と溜息とともにつぶやいた。

(真希はどんな気持ちでいるのだろう、おそらく真希は、大海がぼくをねらっていることを知っているのだろう。

もしかするとそれは、真希が望んだことなのかもしれない、無意識の動機、暗黙の了解)

舟木はどうしても、真希に会いたいとおもった。

そして会えたときの言葉を、いくつか用意することができた。

『君とぼくの、あの香る春の季節は、幻だったのかい』

『どうして君は、もっと上手にぼくを裏切れなかったのかい』

『過去の恋人を、現在の恋人に殺させる気分は、どんなものかい』

(けれども、すべては愚痴だ。

真希にとって、初恋のひとが大切だったにしても、それは思い出が大切なだけなのだ、思い出のなかのぼくをだきしめても、現実の僕をだきしめはしない、現実のぼくなんぞ、真希にとっておぞましい存在なだけだろう。

すべては運命、おそろしい偶然、必然的偶然)

舟木はようやく衣服をつけはじめた。

笛の音はちいさくなってきた。

(それにしても松本大海という男は、どういう育ちをしているのだ。

もし松本玄信の身内だったとしたなら、玄信に問い質してみねばなるまい。

冷血の殺人鬼、いや辻斬りの精神構造だ。

まったくぼくは不運にも、【死んだる団】にねらわれたかのようにではないか  
「さてよ」

と舟木はおもわずつぶやきを発して、なかなかまわってこない頭をこつんとたたいた。

「もしかして、松本大海も【死んだる団】か、となると、真希もか。

まさかまさか、真希はそんなことのできる女じゃない、それに、辻中亀夫の言葉を信じれば、【死んだる団】は、あとふたり、清水清と、たしか立花雪絵。

まさか立花雪絵は、川上真希の別名なんてことはないだろうな。

さてよさてよ、真希の母方の姓は、たしか立花だ」

自分の声におどろいたふうに、おもわず舟木はたちあがった。

頭痛がしたが、こらえられる程度だ。

けれども舟木は、これからどこへ行くべきか、判断がつかなかった。

なにか得体のしれない、暗い粘着性の迷路に、まぎれこんでしまった気分だった。

四日、午後三時。

小林勘助は、山風刑事をうしろにのせて、新宿にむけHONDAナナハンをぶっとばしている。

さっきから山風が叫んでいる。

「おい勘坊、スピード違反で逮捕するぞ、ここはまだ高速道路じゃない、それに高速は二人乗り禁止だ」

まけずに勘助も叫んでいる。

「だんなったら、おっかねえんじゃないの、刑事さんは新幹線だって無料だろう、なんであちきのバイクに乗るんだ」

「莫迦いうな、つきあっただけの話だ、それなのに勘坊と心中じゃうかばれねえ」

「あちきは【死んだる団】じゃねえから、心配ご無用さ」

「勘坊より【死んだる団】のほうがましさ」

「あちきは辻中亀夫みてえに、年寄りの首をはねたりしねえよ、敬老精神ってやつがある、だからだんなともつきあってる」

「朝山完吉を殺ったのは、辻中亀夫じゃないよ」

「なんだってえ、じゃあだんなは、舟木英介っていう探偵をうたがっているん

ですかい」

「舟木には動機がない」

「動機なき殺人ってやつもあるでしょうが」

「いうじゃないか勘坊、それはおれもかんがえた、寝惚け殺人というやつだ、ヤクかなんかをやってラリって殺っちまうとかな。

だがよ、舟木は返り血をまったくあびていないんだ」

「じゃあやっぱし辻中しかいねえんじや」

「いいかよくきけ、おれはさっき或る男に電話をいれた。

前に辻中の同志だったが、内ゲバで監獄にはいって転向して、いまは真面目な工員をやっている。

ようするにこの男から、辻中の情報をききだしたのだ」

「さすがはだんな、なんか有力な情報をつかんだんですね」

「それが意外でな、辻中は日本刀はおろか、鉄パイプや角材すらふりまわせないほどの非力なんだ。

こどものころ小児麻痺をやったせいらしい」

「だってさ辻中っていったら、いわゆる武闘派でしょ、腕力のない武闘派なんてきたことがねえ」

「そこがコンプレックスだったのかな。

だからかえって武闘派を自認した。

あるいは弱みや辛さを逆転させることができる、男のなかの男だったのかも」

『男はつらいよ』ってやつですね」

「つまらん冗談をいうな。

それともうひとつ、辻中は血を見るのがなによりきらいで、血を見るとひきつけをおこしちまうらしい」

「あちきだって血を見るのはきらいだな。

バイクで事故って、じぶんの頭から血がでてるの見て卒倒したもんでさ」

「それは単なる出血多量による失神さ。

あとそれに、辻中と清水印刷の社長とは同性愛だという。

尤もこれは清水社長の〈忍ぶ恋〉だな、『葉隠』でいうところの」

「葉っぱで隠すのは、アダムとイブでしょ、男と男は変人か変態だね」

「なるほど、しかし清水社長はわからんが、辻中は変人か変態かもしれんが狂人ではない。

勘坊のほうがよっぽど狂っている。速度をおとせ」

「バイクに乗ると狂うのさ、ようし、もっとスピードあげてやりませ」

「よせよせ、勘坊はくたばってもいいが、おれにはやらなきやならんことがあ

る、妻子もいるんだ」

「あちきにだって大切なおふくろがいまっせ」

「ええっ、勘坊はみなしごじゃなかったのか」

「古い言い方ですね、古狸のだんな」

「なら、こづかいなんかあげるんじゃないかな、親のスネかじりに」

「それはちがうよ、あちきのおふくろは、若いときの苦勞がたたってよ、ずっと入院中なんです。

あちきはデカの使いっ走りになろうが、かっぱらいやろうが、人殺し以外ならなんでもして、金をかせがなきゃなんねえんです」

「そうかわるかったな、おふくろを大切にしろよ。

おいスピードをおとせ、勘坊が死んだらおふくろが嘆くぞ」

「だんなは一分でもはやく新宿にもどりたいでしょ、あちきは精一杯協力してるんです」

「おいやばいぞ、白バイが追ってくる」

「そりゃあおもしれえ、あちきのバイクの威力を見せてやりまっせ」

「やっぱり勘坊は【死んだる団】よりタチがわるい」

「つまらんこといってないで、真犯人をおしえてくれよ、だんな」

「それがわかりゃあ、苦勞はしねえ。

凶器が見つかればはっきりする。

おれのカンでは犯人は清水、おい赤信号だぞ」

「問題ないですよ、白バイにおこられたら、だんなの命令でと正直に白状します。

それで犯人は、清水次郎長」

「莫迦たれ、清水清だ、清水印刷の社長がくさい」

「それじゃその次郎長も、【死んだる団】なんだね。

すげえカんだ、あちきの名前、だんなにあげます」

「莫迦、いいかげんにしろ」

「バカにたいしてバカなんていうと、だんなだって監獄いきでっせ」

「へらず口はやめろ、運転に集中しろ」

「清水には動機があるんですかね」

「それは京都府警がこれから調べることだ。

朝山完吉の死で、学生運動も下火になるな。

だが辻中もだれかをねらっていることはたしかだ。

『偉大なる殺人』といった藤上吾郎のせりふは、無視できない、総理大臣より大物をねらっているということだ」

「佐藤栄作より大物っていったら、天皇陛下しかいねえじゃないですか」

「そうだよなあ、天皇暗殺なんてことになったら一大事もいいとこだ。

けれどもさ、おれの調べでは陛下は京都に行くご予定がない」

「どっちにしたって、だんなは京都に残ったほうが賢明だったんじゃないか、八ッ橋も食えるし」

「大莫迦者、いいか、この事件には裏がある、これは組織的な事件だ、組織的な事件にはかならず指導者か黒幕がいる、実践者よりタチのわるい人間が、影にきつといるんだ。

いずれにしても辻中も清水も、裏をつきとめる相手としては簡単ではない、それでも一人とつかまえて吐かせる必要がある、それで女にしたんだ、立花雪絵。

だからおれは、もどらなければならない」

「さすがはだんな、よっしゃ、しっかりつかまえてくださいよ、もっとスピードをあげませ」

「おれは冷えた、生理現象だ、あそこのちっぽけなレストランでひと休みしよう」

「そんな呑気にしてたら、白パイにつかまっちゃうよ」

「あれは冗談だ」

「冗談じゃないよ、まったく」

勘助が、バイクをレストランの駐車場に駐めた。

ふたりはブラック・コーヒーを飲んだ。

「そういえば、京都で勘坊の兄貴を見たな」

山風が、おもむろに話した。

「金助をですか。

あちきの兄貴、元気でしたか」

「飛ぶ鳥を落とすくらい元気で、ハーレーダビッドソンにまたがっていたよ」

「なんですか、そのハレハレって」

「昨年アメリカで、『イージー・ライダー』という映画が封切られた。

たいへんな話題で、ことし日本にもくるだろう。

その映画の主演やってる、ピーター・フォンダとデニス・ホッパーがのっている、チョッパー・スタイルのやつだ」

山風は両腕を前に突きだして、ハーレーダビッドソンの運転をするかっこうをした。

「そいつは高いだろうよ。

そんな金、兄貴にあったかな、そんなマシン、日本にあったかな」

「おそらく、私立探偵の麻暮正作氏に買ってもらったのだろう」

「するてえと、兄貴は、またマグレさんの下働きを」

「よく似た兄弟だよ。

金坊が京都にきたのは、まちがいなく麻暮氏の指令だな」

「するてえと、マグレさんも【死んだる団】を探っているんで」

「そういうことになるかな」

山風は腕組みをした。

四日、午後三時半。

小金井豊は、〈日刊スクープ〉本社編集局の隅のソファで横になっている。

目はつむっているが、眠っているわけではない。

すごい臭気を発散させているので、だれも近寄ってはこない。

デスクに削られたが、小金井は号外に掲載された記事の三倍の原稿を書いた。

それでも小金井には、まだ書きのこしたなにかがある気がしていた。

それがなんなのか、小金井は気になって眠れない。

高杉京平の自決の有様は、詳細に書いた。

京平のせりふも京平の狂気も、簡潔に書いた。

京平の経歴も京平の過去の犯罪も、わかっていることは書いた。

【死んだる団】の正体は、現在はまだ不透明だが、いずれ解明されるだろうと書いた。

いったいなにかが漏れてしまっているのか。

自問しつつ寝返りをうつと、空気がにごった。

このときはじめて小金井は、じぶんのひどい悪臭に気づかされた。

「そうかそうか」

ちいさく叫びながら上半身をおこした。

たしかに書き漏らした。

それは高杉京平のニオイだ。

(いまの二十歳の青年のおおくは、髪を気にしてドライヤーをつかい、ブランドもので装い、ブリーフにもコロンをふりかけている、よくいえば、清潔さというものに注意をはらっている。

けれども京平はまったくちがう、かといってヒッピーでもない、ヒッピーはファッションだ、京平にはファッションなんてものは、まったく無関係なのだ、京平は着たきり雀で、ひどく臭い。

おれは臭いだけの人間だけれども、ボロは着ててもこころの錦、京平にはなにか、気品といってもいいものがあった、そうだ、高杉京平には、気品のニオイがあったのだ。

しかしあれをどう表現すればいいのか、あのニオイはあのカオリは、直接会って言葉をかわした者でなければわからない)

このとき、編集局長の山本久治が、数人の記者をしたがえてやってきた。

山本局長は、小金井の臭気を防ぐためか、さかんにパイプをふかしながら、小金井の前に立った。

「小金井君、でかした、スクープ賞、特ダネ賞、そして最も名誉のある局長賞の、三冠王確定だよ。

号外は大変な話題で、うちの夕刊はいつもの三倍刷った、

駅でもどこでも完売確実で、テレビの連中も、してやられたと悔しそうだったな、ざまあみろ、愉快愉快」

「はあ、そうですか」

小金井は気のない反応をしめした。

小金井にとって、賞なんてものは、死んだときに棺桶には、けっしていれてほしくない代物だった。

「ところで小金井君、お疲れなのにすまんが、お手柄ついでに、もう一仕事してから、名古屋支局へ帰ってもらえんかね。

本当なら帰らずに、本社で活躍してもらいたいものだが」

「仕事なら、なんなりと」

小金井の声が生気をとりもどした。

「じつは、朝刊の社会面の隅っこに置いておいた記事がある。

少年Aの、新宿の公衆便所での自爆だ。

これが、さっきの情報だと、どうやら【死んだる団】らしいとのことなのだ」

「ええっ、【死んだる団】」

小金井は素っ頓狂な声をあげた。

「そんなことで、うちのエースが驚いちゃいかんよ、もうひとつビッグな情報がいっぱい。

昨夜、歌舞伎町と六本木で、猟奇殺人があった、男のイチモツを切りおとすという、すさまじい手口でな。

ホシはむろん女だ、しかもすごい美人らしい。

そしてこの女も【死んだる団】」

「むむむ」

小金井は絶句した。

「いいかね、明日の朝刊の目玉記事は、この美女、いや鬼女だ、それをまた、小金井君が署名入りで書く。

すぐに麻布署にとんで、花井勇太刑事に会ってくれんか。

明日の朝刊は、今日の夕刊の三倍は刷るぞ。

万一締め切り時間を過ぎたら、しかたないから号外だ。

小金井君なら、万一はないとおもうが、頼むよ、〈日刊スクープ〉の未来は、小金井君の双肩にかかっている」

山本局長はパイプをくわえたまま、脂ぎった顔をぐっとちかづけてきた。

パイプの煙と、きちんと整えられた白髪まじりの髪からただようヘアリキッドが、小金井の鼻をおそった。

(くそジャーナリズムの、へたれマスコミの権化、臭気たっぷりの、優越感まるだしの文化人め。

仮にこの小金井豊が【死んだる団】だったら、真っ先にあんたをぶっ殺すだろうよ)

こころのなかでつぶやきながら小金井は、

「万事了解しました」

きっぱりといった。

四日、午後三時四十分。

朝山善吉は、京都府警の遺体安置所で、父朝山完吉のなきがらと対面している。

頭部と胴体をまにあわせでつなぐために、首には包帯が巻かれていた。

父の死に顔に苦痛のあとは見られず、大声をあげれば目をさますのではないかと、善吉にはおもわれた。

もうこれで父の口からは、大海の父親との関係をきくことができなくなった。

けれども善吉には、そんなことはもうどうでもよくなった。

そうして、父をだれが殺したかも。

味方の数の数万倍も、敵の数がおおかった父が殺された。

殺すほうにもそれなりの理由があったのだろう、その理由がなんであれ善吉には、父を誇りにおもう気持はつよくあったものの、憐れむ気持はおきなかった。

三十分前まで立ちあっていた警官が去り、部屋には善吉ひとりがのこされた。

もうおもいきり泣いてもいいだろう、とかんがえたけれども、不思議と涙は



でなかった。

悲しくないわけでもなく、おおきな喪失感もある。

それなのに涙が一滴もでないのだ。

せつない流行歌をきいても、あわれな映画のワンシーンを観ても、じゅうぶん泣けるのに、父の死という一大事に泣けないなんて、ぼくは冷血漢なのかと忸怩たるおもいがわいた。

(もしかすると、ぼくは死を決意した人間だからなのかもしれない。

いったん死を決意してしまうと、本人にとって死はかなしむべきことではない、のこされた人間が、のこされた己があわれで泣くのだ。

ぼくはのこされた人間ではない、遠からず父のいるところへ逝く人間なのだ。

それでも、父の信奉者や生徒や友人は、ひどくかなしむにちがいない。

でもみなさんに、ぼくはいいたい、朝山完吉の人生は、満足のいくものだったはずだ。

母には捨てられたけれども、その母も自殺して先にむこうで待っている。

ライフワークの『暗殺論』も世に問うことができたし、好きな酒もたらふく飲んだ。

死に方が死に方だから、父の名は永久にのこるにちがいない)

善吉はここまでかんがえて、ふと自問した。

(それなら、ぼくの二十二年間の人生は。

ぼくはぼくなり学んできた、が、父の足元にもおよばない。

それはそうだ、もし死を選ばなければ、ぼくの人生はこれからなのだから)

このとき、なんの前ぶれもなく、善吉の脳裡に鮮明にうかびあがった映像があった。

三歳の自分が、父に手をひかれて、三十三間堂のまわりを廻っている。

なんどもなんども、ゆっくりと。

秋の夕暮れで、赤とんぼが泳いでいた。

父はときどき溜息をついた。

おそらくあの日は、母が家をとびだした日だったのだろう。

自分が疲れて泣いたので、父は肩車をしてくれた。

秋祭りの日だったのかもしれない。

かえりみち、夜店の屋台で父は風車を買ってくれた。

いちばん古い思い出だった。

善吉の胸のおくから嗚咽の音がこぼれた。

全身をふるわせて、善吉はつめたい床に泣きくずれた。

(翌々日の告別式は、質素に簡略におこなわれたにもかかわらず、焼香の呼び

とが、列をなし、最後尾は、三十三間堂まで、三千メートルにおよんだ)

四日、午後五時。

小金井豊と花井健太は、東京タワーの展望台にいる。

山本久治編集局長の命をうけた小金井は、〈日刊スクープ〉本社ですばやくシャワーをあびると、麻布署の花井勇太刑事に電話をいれた。

花井勇太刑事が聞き込み捜査で出はらっていて、かわりに新宿署にもどろうとしていた花井健太刑事が電話口にてたのだった。

花井健太は小金井記者からの取材申し込みをいったん断ったが、相手が高杉京平自決のスクープ号外を書いた記者だとすると、むしやうに会ってみたくなり、麻布署からあるいて三十秒の、六本木交差点の喫茶店〈アマンド〉の前で落ち合うことを了承した。

(ちなみにここは、昨夜、立花雪絵が黒人に声をかけられた地点だ)

ふたりは初対面の挨拶もそこそこに、寒風をさけ、しかもだれにもきかれる心配のない場所として、平日の終業まじかの東京タワーを選んだのだった。

あんのじょう展望台には三人の客がいるのみだった。

小金井が売店であたたかいコーヒーをふたつ注文し、ひとつを花井に手わたした。

「おたがい睡眠不足って顔ですから、すこし目を醒まさせてから話をしましょうか」

そう小金井が笑っていうと、花井も笑顔でかえした。

「でもいいのかい、朝刊に載せるつもりだろう、のんびりしていると締め切りにまにあわなくなるだろ」

「それは局長の勝手な腹づもりで、原稿を書くか書かないかは自分できめる」

「なかなか肝のすわった人だ、記者なんかにしておくのはもったいない」

「あなたも刑事なんかにしておくのはもったいない二枚目だね」

記者嫌いの花井と刑事嫌いの小金井は、おたがい「なんか」を強調して笑いあった。

小金井がなにげなく下界をながめると、無数の建物は灰白色にくすみ、地平線には厚い霧がわだかまっていた。

これが東京か、と名古屋人の小金井はおもった。

「じつは東京タワーははじめてでね、いちどのぼって見たかったから、夢が叶った。

このひろい東京に、【死んだる団】は何人いるのだろう」

「十人か百人か、いや千人かもしれない、けれども我々が逮捕しようとしているのは、まずは一人」

「めどは立っているんだよね、その落ちつきぶりからすると」

小金井はわざと嫌味っぽくいった。

相手をムキにさせ、確信的情報をえる、小金井の常套的な作戦だ。

「兄貴は優秀な刑事だ。

女は今日中には逮捕されるはずだ」

「証拠は揃っているんだろうね。

推定有罪じゃ、いずれ警察のメンツはまるつぶれになる」

「余計なお世話だね、証拠はありすぎるくらいなんだ。 目撃者もいるし、兄貴の描いた似顔絵もあるから、被疑者は絶体絶命だよ」

絶体絶命という言い方をきいて、小金井はまたしても高杉京平をおもいおこした。

もしかすると【死んだる団】にとって、絶体絶命こそが生き甲斐、いや死に甲斐なのではないのか。

「自信満々というわけか」

小金井は、この広い東京で、たった一人の女を発見するなんて、どんなに証拠がそろってしようと、困難なことではないかとかんがえた。

それでも反面、花井の自信から察して、あんがい本当は、もう隠れ家をつきとめているのではないか、すでに逮捕されているのではないか、とさえかんがえてみた。

いまは原稿を書くときではない、と小金井は山本局長のパイプの煙を思いだしながらかんがえた。

見事な記事になるのは、女の逮捕の現場のみだ、生の現場の状況だけが、生きた記事になる。

そうかんがえた小金井は、なにはともあれこの花井健太刑事、さらにつながっている花井勇太刑事から、目も耳もはなさないことだと決めた。

「しかしひとつだけ警察にとって困ることがある」

花井は重そうに口をひらいた。

「ほう、あなたがたにも困ることがあると」

「それは、女が自殺してしまうことだ。

そうされては【死んだる団】の全貌がつかめない。

藤上吾郎、高杉京平が自殺した現状ではね」

「そうか、それはそうだ」

小金井はしきりにうなずいた。

小金井がかんじる以上に、この花井刑事は優秀なのだろうとおもわれた。

花井も身をのりだして下界を眺めながら、

「小金井さん、号外を読ませてもらったが、ひとつご意見をうかがいたいんですが」

「なんででしょう、あらたまって」

「【死んだる団】の正体ですよ、あれはいったい」

「いったいなんなのでしょね。

私はいまのところ高杉京平しか知らないが、そのなんというか、暗い情念に圧倒された。

【団】というくらいだから、リーダーもいるだろうしバックに何者かが存在するにちがいない、けれども私のしるかぎり、高杉京平は単独者だった。

ねえ花井さん、私はいまこんなふうにかんがえている、かんがえざるをえないんですよ、自殺をかんがえない人間は、人生を真剣にかんがえていない人間ではないかって」

「それなら僕なんかは、人間失格です」

「じつは私も、失格」

「自殺なんかかんがえる暇もないくらい、忙しかったからなあ」

花井は、下界の遠くの、さらに遠くを見ながらつぶける。

「おそらく小金井さんもそうでしょう、が、【死んだる団】のややこしいところは、連中が自殺者である前に殺人者であるということだから、人間合格とはいえない。

僕は正義を守る仕事にたずさわっている以上、連中をひたすら憎む」

「それはそうですが、殺される側にも、殺されるだけの原因があるのではないかと」

「今朝、京都府警にいていた、僕の先輩刑事から連絡があって、哲学者の朝山完吉が殺された。

これも【死んだる団】のしわざらしい」

「あの『暗殺論』の朝山先生が、【死んだる団】に殺られたとは、信じられない」

「朝山先生には、たしかに殺されるだけの原因があるだろうけど、ノーベル賞候補にもあがっている、日本の宝ですよ。

【死んだる団】のせいで、日本はおおきな損失をした。

〈日刊スクープ〉も情報をつかんでいるころだから、小金井さんもそろそろお帰りになったほうがよろしいんじゃない」

「局長におまかせですよ、それよりも朝山先生の思想を認める刑事もめずらし

い」

「あら、そうなんですか、僕はただぜんぜん理解できないだけで」

「そうか、もしかすると」

このとき小金井は、おもわず両手をたたいた。

「もしかすると、なんででしょう」

「もしかすると、朝山先生を本質的に理解できれば、【死んだる団】の存在を理解できるかもしれない。

そして【死んだる団】の正体すらも解明できるかもしれない」

「となると、理解できない僕には解明できないってことになる」

「気にしないで、私のカンにすぎませんから」

「ところで小金井さんに、もうひとつご意見をうかがいたい」

「取材にきたのは私のほうなんですがね」

「小金井さんのカンでもいいです。

一般論でいって、佐藤栄作首相が暗殺される以上の殺人事件って、なんでしようか」

「〈朝山完吉殺害事件〉は、そういえなくもない。

しかし常識的には天皇陛下かな」

「高杉京平の自決に前後して、【死んだる団】を自認して自爆した、藤上吾郎という若者がいる。

その藤上がいいのこしたんですよ、全共闘の辻中亀夫が、殺るって」

「それなら〈朝山完吉殺害事件〉の犯人は、辻中亀夫ですか」

「ところが先輩刑事の話では、被疑者はほかにいると」

「やはりね、辻中亀夫は朝山先生を尊敬しているとのこと。

同様に、辻中亀夫は全共闘なのに、なぜか天皇陛下を尊敬しているとのことです」

「わけがわからなくなった。

ほかに思い当たる人物はいませんかね」

「また私に取材ですか、いいでしょう、このさいだから私のカンを發揮しましょう。

首相以上の大物はたしかにいますが、一般論でいうとどうかな。

だが純粋な意味でいうと、あの人物しかいない」

「じらさないでくださいよ、その名は」

「小金井豊」

「その答は純粋ではないなあ」

「松本玄信」

「政財界最大の巨人ですね、通称、ドン松本。

この人物なら、あんがい首相以上の権力者かもしれない」

「日下典禪」

「新興宗教界最大の巨人ですね、〈愛信会〉の教祖、現代の現人神、そうよぶひとたちもいる。

あの人物が死んだら、殉死する若者が五万といるだろう」

「北山極齋」

「芸術界最大の巨人だね、外国でも評判が高い、雪舟の再来、そうよばれてからもう二十年たつかな。

僕の兄貴の勇太は絵が好きだから、極齋の美術全集をもっていますよ」

「どうです、どうおもわれますか」

「まあ、この三巨人なら、人によっては首相以上だということかもしれない」

「三巨人ではなく、一巨人なんです」

小金井はやや唇をふるわせ、かなり慄然たる表情をした。

「ええっ、意味がわからない」

「松本玄信、日下典禪、北山極齋の存在は、三で一、つまり同一人物なのです。

三つ子だという説もあったが、そうではなかった。

新聞社やテレビ局や出版社にも圧力がかかっている、箝口令もひかれていて、真実を公表できない。

尤もこの事実をしっている者は、ほんの一握りですがね」

「信じられない。

〈政治と文学論争〉なんてものがひところ流行ったが、そんなレベルではない。

いったいこういう才能って、しかも図抜けた才能って、両立するものですかね」

「僕にも信じられない。

巨人のなかの巨人、というしか、言葉が見当たらない」

四日、午後五時半。

山内参三は、麻布十番の商店街を、サンダルばきで買物カゴをさげて、うろついている。

「おれは河原の枯れすすき」

ではじまる『船頭小唄』を、暗い声で口ずさみながら。

たそがれはおわろうとしていて、スモッグが周りをかすませている。

そんな光景も、肌にしみる寒気も、山内の気分合っている。

仮に、いまの山内の精神状況をいうなら、

「十年かけて貯めてきた金を、ガチガチのかたい本命馬券につぎこんで、スツカラカンになってしまった男の心境」

なのだ。

立花雪絵の誘惑にも屈せず、早朝まで書きあげた原稿だったが、昼間編集者が持参した〈日刊スクープ〉の号外が、山内を地獄へ突きおとしたのだ。

山内は、なかなか情報をよこさない舟木英介をうらみながら（まだ舟木からの速達は届いていない）、また麻暮正作がひどく気にした久遠寺の事件を大昔のことにかんじながら、小金井豊署名の記事を読んだ。

その迫力のある記事を読み、生々しい写真を見て、もう自分の原稿が役たらずになったことを覚った。

自分は【死んだる団】のことを、頭のなかだけで書いただけにすぎない。

だが小金井は、命がけでこの記事を書いたのだ。

そしてその姿勢は、五年前までの山内のものだった。

しばらく安心していただけの山内は、電気ストーブの横でまるまって眠っている立花雪絵を、なにげなく見おろした。

するとふいに頭のなかで、

「こんなことなら据え膳を食っておけばよかったな」

という嘲りの声をした。

「こんなセクシーな美女とは二度とお目にかかれぬぞ」

という煽る声もした。

「仕事中はインポだなんていいかげんなことをいうな、おまえはアレルギー性鼻炎だから、女のフェロモンにかんじなかつただけなのだ」

という真相解明の声までした。

「いや、いまからでもおそくはない」

と山内は、声にだしてつぶやいた。

声がきこえたのか、雪絵がはげしく二度三度と寝返りをうった。

微かだがとてもつらそうな喘ぎが、雪絵の喉からもれた。

つぎに寝返りをうったとき、雪絵はふつぶせになった。

山内が貸したセーターの裾がめくれ、真っ白い臀部があらわになった。

形のよい臀の中心に、陰部がのぞいている。

陰毛をおしのけて、むきだされたヴァギナは、こころなしか漲って濡れ、なにか海底の生物をかんじさせた。

もしペニスを押しあてたなら、苦もなくそのまま吸いこまれていきそうにおもわれた。

けれども山内は、なにもしなかった。

押入から毛布を取りだし、そっと雪絵の下半身にかけてあげただけだった。

そしてこのとき山内は、この正体のわからぬ女に、恋情としかいいようのないものを、いだいてしまっている自分に気づいた。

冷蔵庫からビールの中ビンを取りだした山内は、ラップのみで一気にもみほすと、自分も雪絵の隣でまるくなって眠ってしまった。

目をさましたのは午後四時過ぎだった。

腹がへっていた山内は、どんなに落ちこんでいても腹が空くという事実をうらめしくおもいながらも、買物カゴをさげて、まだ眠っている雪絵をそのままに、外へとびだしてきたのだった。

『船頭小唄』を歌うのにあきてきたころ、買物がすんだ。

ひととおり食料品と雪絵用の衣類を買ってもどると、雪絵が小走りにむかえにでた。

「おかえりなさい」

ほんのいっしゅんだけ、山内は雪絵を新妻とかんちがいした。

「ただいま、よく眠れたかい」

「おかげさまで、あら、お買物だったのね」

「まあね、寒いから鍋でもつくろう、いっぱい食べて、あったまってから帰るといい」

「わたしにつくらせてくれませんか」

「じゃあ、いっしょにつくろうか」

「うれしい」

無邪気にとびはねた雪絵をあらためて見ると、どこから探したのか、山内が年に一度しかつかわないうエプロンをつけていた。

無駄になった原稿のことをすっかり忘れた山内は、それだけで腹もこころも満たされた気持になった。

四日、午後六時。

松本大海は、タクシーで日光にむかっている。

自分の死に場所を、夜の華巖の滝と決めたのだ。

「あとどのくらいかかりますか」



ずっと無言でいた大海が、はじめて運転手に声をかけた。

「まだ二時間はかかりますよ」

ちゃんと運賃が支払われるか、そればかりを心配していた運転手は、ぶっきらぼうに答えた。

(ということは、自分の命も、あと三時間余りというわけか)

死ぬ前に一度、真希に会いたいとおもったが、会う手だてはなかった。

それに、真希はもうとっくに逝っているかもしれない。

そのおもいは、大海に死の恐怖をわすれさせた。

大海は、タクシーからおりて華巖の滝にむかう一時間余りを、舟木英介の冥福を祈る刻にしたいとかがえた。

後悔はなかったが、考え方ひとつで、舟木とは親友になれたかもしれないと、ふっとおもった。

すくなくとも、川上真希という女性を、心底たいせつにしたいと念じた点で、共通点はあった。

自分があじわった喜怒哀楽を、かつて舟木もあじわったはずだ。

無意識に大海は、目の前で両掌をあわせて瞑目した。

その様子を、運転手がミラーでのぞいていたことはしらずに。

(三十分後、不審にかんじた運転手が車をとめ、便所にいくふりをして、警察に通報。

一時間後、松本大海は、華巖の滝にしずむかわりに、栃木県警に身柄を保護されることになるのだ)

四日、午後七時半。

山内参三と立花雪絵は、牡蛎鍋に舌つづみをうっている。

鍋から立ちのぼる湯気が、ガラス窓を曇らせ、ふたりの喉をなめらかにさせる。

会話がはずみ、ふたりは窓のむこうで氷雨が降りはじめていることもしらない。

「山内さん、さっきの話ですけれど、べつに落ちこむ必要はありませんわ」

「ああ、【死んだる団】の原稿の件ね。

nでもさ、この原稿料から、ふたりの探偵の謝礼をはらわないといけない」

「お金の問題なら、ちいさいことではないかしら。

才能があれば、お金はいつでもついてくるわ」

「才能、あるのかなあ」

「仕事をしているときインポになるくらいですもの」

雪絵がわざと媚びをうる笑い方をしたので、山内は哄笑した。

「でもいまは、性欲より食欲ですものね」

「皮肉かね、君を抱かないで失礼だったかな」

「失礼だなんて」

「すくなくとも傷つけたようだ」

「傷ついたわ、山内さんならレイプされても構わないと覚悟していたのに」

「嘘をつけ、君は試したんだろ」

「なにを試したのかしら」

「おれの本能を、そして君の性的魅力を」

「あら、バレてしまいました」

雪絵が可愛らしい舌をのぞかせたので、山内はまた哄笑した。

こんなたのしい食事は何年ぶりだろう、こんなに笑ったのは何年ぶりだろう、と思いだしながら。

「でもガッカリしましたわ、わたしに欲情しない男性もいるのね」

「そんな男は男じゃない、おれはたまたま」

(たまたま君に欲情ではなく恋情をいじめてしまった)

といいそうになって、やめた。

そして、そのかわりにこういった。

「こんないい女とセックスなんかしたら、絶対にバチがあたって、腹上死するにきまっているから、おそれをなして、おもいとどまったのさ」

「まあお上手なこと」

「この解答、満足かね」

「最高のセックスよりずっと」

「ほかにも理由があるんだが、いっていいかい」

「きてきて」

「君のあそこは、見るからに立派で美しい。

おれのここは、見なくとも貧しく醜い。

君と性交しても成功はおぼつかない。

大失敗して、おしおきされるのがこわかったのさ」

「あら、どんなおしおきをすればいいのかしら」

「たとえば、おれのここをチョン切るとかね」

つと雪絵の表情がすこぶる硬くなり、つりあがった目に蒼白い光が宿った。

それはつかのまだったけれども、山内は見のがさなかった。

けれども山内は、このいっしゅんの雪絵の顔を、すぐにおすれた。

三十分後に想い出すまでは。

「エッチな話はおしまいにして、それでは【死んだる団】の話にもどりましよう」

雪絵は真顔でいった。

「【死んだる団】に興味があるのかい」

「興味がないひとなんているかしら。」

さっき見せていただいた〈日刊スクープ〉の号外ですけど、記事のなかみは高杉京平という青年のことだけでしたね。

山内さんのお話では、【死んだる団】はいっぱいいるんでしょう」

「たぶん、かなりの人数になるかもしれない」

「それならおそらく、その【死んだる団】の核が在るはずでしょう、それを書いたらどうなのかしら」

「なるほどなるほど」

「あの号外記事は、とてもセンセーショナルでエキセントリックなものでしたけれど、やはり一部のとか表面的なものですわ。」

山内さんは【死んだる団】の本質的で深層的な、核をお書きになればいいのでは」

「ううむ、君はすごいひとだね、ありがとう、そうするよ。」

おれはライターとしての核を見誤るところだった、なんだかとっても勇気がでてきたな」

「素敵なひと。」

勇気だけでなく性欲もでてきてくれるとうれしいんですけど」

「また話がもどったか。」

正直いうとさ、君をだきたい本能は、だれにもまけないとおもうよ。

でもさ、それよりか、君といっしょにいたいという感情のほうが、何倍もおおきいんだ」

「うれしい、そんなこといつてくれたの山内さんだけ」

雪絵は微笑みながら涙ぐんだ。

セクシーな姿態よりも、それこそ何倍も、山内はこの雪絵の表情に魅了された。

「どうだろう、いいにくいんだが、君さえよければ、このままずっとここにいてもらえないか」

「セックスを強要するかもしれない女ですけど」

「よかろう、おれも根は助平だ」

「腹上死しますわよ」

「よかろう、男の勲章だ」

「あそこをチョンぎられますわ」

「よかろう、宦官になって天下をとるぞ」

「【死んだる団】かもしれませぬわよ」

「よかろう、スリルのある生活がおくれそうだ」

雪絵が目に涙をためたまま、からだをくねらせてすりよってきた。

左手を山内の頬にふれて、雪絵は唇をさしだしてきた。

そしてその体勢のまま、右手で斜めうしろにあるテレビのスイッチダイヤルをひねった。

そのとき玄関でチャイムがなった。

雪絵は唇をそっとはなし、

「おねがい、居留守をつかって」

と艶めかしくささやいた。

山内は立ちあがって、上目づかいに見あげる雪絵に、

「もし居留守をつかっていたら、君にも会えなかったからね」

といいながら玄関にでた。

のぞき窓からうかがってみると、スーツにレインコートを着た男と制服を着た男が、ふたり立っていた。

警官と刑事だと、山内にはすぐにわかった。

雪絵のたのみをきいて、居留守をつかえばよかったといまさらながらおもったが、気配を気づかれていることはまちがいがなかった。

渋々ドアをあけると同時に、厭な予感がした。

「山内さんですね、自分は麻布署の花井といいます」

警察手帳をだした花井勇太刑事の、レインコートが濡れていた。

「おれはたしかに山内だが、警察をよんだおぼえはないよ」

「ほんのすこし、おたずねしたいことがありますて。

ここは冷えますので、一メートルだけ、なかへいれてもらえませんか」

「許可できないね。

おれが一メートルだけ、そとへでようか」

「警察がお嫌いですか」

「好きなやつはいないよ。

おれはやつらのうちで、とびきりさ。

つい一分前まで、おれは一生デカとは口をきくまいと決めていたんだ」

「私立探偵はお好きなようで」

花井刑事の口元が、意味深な笑いでゆがんだ。

「なんだ、あんたはデカでなくてスパイか」

「山内参三さんといえば、有名なライターですから。

『ベトナム通信』は、僕も愛読しておりました。

出版社のほうへ電話をして、若干の情報を仕入れたんです。

勝手なことをしてすみませんが、ささやかな事件ではないもんでして」

「ささやかな事件でなければ、【死んだる団】事件だとでもいうのかね」

「そのとおりです」

花井刑事はきっぱりといった。

山内は血の気がひいていくのを自覚した。

「おれは【死んだる団】のことを調べて、正確に書こうとしているだけだ。

おれのことを【死んだる団】だなんて、密告した野郎がいるのか」

「目撃者がいます。

しかし山内さんを密告したのではありません。

この部屋には行っていく、返り血をあびた女をです」

「おれはずっと男やもめ暮らしだ。

なんなら、この兎小屋を家宅捜査してもらってもいいが、令状はもってきているんだらうな」

「それがあれば疾うに踏みこんでいます。

その女は【死んだる団】です、昨夜ゆきずりの男をふたり殺しています、しかも男根を切りとるといふ残忍な手口で。

山内さんが無事だっただけでも、不幸中の幸いといわねばなりません」

おれが知っている刑事に、こんな怜悯な男はいなかったと、花井の童顔のなかの鷹の目に似た両眼を、山内は見つめた。

花井はふところから、自ら描いた人相書きをとりだすと、山内の目の前に突きだした。

その絵は、まさしく立花雪絵だった。

喉になにかがつかえて、山内はどんな言葉もだせなかった。

雪絵の目のなかの蒼白い光を、山内はこのとき否応なく想いだしたのだった。

両手で花井を制し、山内はそのまま後ずさりしつつ部屋にもどった。

部屋の中央に、雪絵が蒼白な顔をして立っていた。

先ほどきざんだ野菜のかけらがついている、包丁を手にしていた。

雪絵は無言で、涙をためた目で山内を見つめていた。

テレビではアナウンサーが、昨夜の猟奇事件のあらましを、興奮した声でつげている。

雪絵が包丁の先端を、自身の乳房の下に当てるのと、山内がとびかかるのと、まったく同時だった。

ふたりは烈しくもみあい、そこに花井刑事と警官が踏みこんできた。

花井が包丁をすばやくとりあげると、雪絵はその場にくずれ、そこでかたまった。

雪絵はかすり傷ひとつなかったが、山内は掌から夥しく血をながした。

包丁の刃を、素手でにぎったせいだった。

「救急車をよびましょうか」

警官が叫んだので、雪絵がはたと気づき、あわててキッチンタオルで山内の掌をおさえた。

「ごめんなさい」

雪絵の微かな声は、山内にしかきこえなかった。

「だいじょうぶ、救急車をよぶほどではない。

だがどうして君は」

(おれを殺さなかったんだい)

と山内はきこうとして、花井の言葉にさえぎられた。

「山内さんはこの女のなんなんですか。

この女とどういう関係にあるのですか」

(ただいっしょに牡蛎鍋を食べただけの関係だ)

というつもりだったが、じっさい口からでた言葉は、まったくちがうものだった。

「よくきいてくれた、じつは恋人なんだ」

雪絵がするどく顔をあげて目を見ひらき、花井は溜息ついて目をつむった。

「そうですか、それでいいんですね、それなら、署に同行してもらえますね」

花井の言葉がおわる前に、山内は黙って首を縦にふった。

四日、午後八時。

山本久治は、いつもどおり机上の左右に一升瓶を据えて、コップ酒をあおっている。

飲みほすたびに、編集局のすみずみにまで響きわたる大声で、怒鳴りちらす。

「いったい小金井はなにをやっとるんだ、ジャーナリストの使命をわすれとるんじゃないかな。

記者の風上にもおけん、記者ではないブンヤだ。

朝刊の締め切りをぐいいんとのばせえ、万一のばあいは号外だなんていったのは、小金井のプレッシャーをかんがえての親心よ。

運良く朝山完吉が嵯峨野で殺されてくれなければ、第一面は白紙だったぞ。

やつは単に悪運がつよいだけなんだ、本社によぶどころか、沖縄支局に左遷だ。

おい君、寄らば斬るぞ、だれもおまえなんぞに用はない」

「あのう、局長、小金井さんから電話がはいっているんですが」

「莫迦者、それをなぜはやくいわん」

若い記者に怒鳴りついでに、小金井を怒鳴りつけようと電話口で身構えた山本編集局長の、酒灼けの顔色がみるみる変わっていった。

「ななな、なになに、【死んだる団】が捕まっただと。

猟奇事件の例の女か、そうか、でかした。

ななな、なになに、花井兄弟刑事の肝いりで、単独取材ができそうだと。

さすがは〈日刊スクープ〉の華、局長賞の小金井君だ。

明日の朝刊のトップだと、むむむ、むろんだ、むくつけきオヤジの死なんかよりも、猟奇美女の逮捕にきまっておる。

ななな、なんだと、これで【死んだる団】の全貌があきらかにされるだと、よよ、よし。大見出しはそれでキマリだ。

小金井君よ、昇給は確実、社長賞どころか〈菊池寛賞〉もとれる。

どどど、どうだい、この山本の娘を嫁にもらってくれんかね、そそ、そうか、かんがえてくれるか」

山本編集局長の声は、一階の警備員にまで聞こえた。

(そしてその警備員の口から、翌朝その警備員の娘に伝えられた。

その娘は、一年前から小金井豊にラブレターまがいのファンレターを送りつづけている女性で、それから強度のノイローゼとなり、以後三年間、小金井豊との婚約が決まるその日まで苦しむことになる)

四日、午後八時半。

山風順一は新宿署にもどっている。

茶をのみながら、小林勘助と雑談をしている。

「それにしても、よく五体満足でたどりついたもんだ」

「楽勝だよ、あんがいだんなは弱虫なんだな」

「莫迦いえ、勘坊のせいなんかで、犬死にしたくなかったただけだ、バイク事故

で死ぬなんてのは、最悪の死に方だからな」

「【死んだる団】に殺されるよりも」

「はるかに最悪だ。

永山一郎を想いだす」

「だれですか永山って」

山風刑事はひと呼吸おいてから語りだす。

「おれは十年前、山形県警にいた。

簡単にいうと、当時の警部補と衝突して、結果とばされたんだ。

おれはさっそく、ある危険人物をマークするよう県警の上司から命令された。

その危険人物とやらは、田舎の小学校の先生だった。

おれはその若い先生となんとか話をしたが、とても気になる男だった、友情、みたいなものすらかんじたな。

おれも世の中から冷飯を食わされてる気分だったが、先生もそんな精神状態だったのだろう、おたがい曳かれ者の小唄をうたっている。

そういえば、藤上吾郎は、どこか永山一郎に似ていたな。

もし永山一郎がモノを書いていなければ、十年はやい【死んだる団】になっていたかもしれない。

永山の、たしか『ぶんまわし』というタイトルの小説を読んだ。

おれにはちんぷんかんぷんだったが、それでも佳いモノだとおもわれたよ。

五年後、おれがこっちにもどされる年に、永山一郎は死んだ。

まだ二十代で、自分が運転するバイク事故だった。

おれは現場にかけつけたが、涙があふれてしかたなかったよ、こんな体験は、最初で最後だ。

永山一郎は、田舎の田圃のなかで、まるで野良犬さながらに死んでいたんだ」

「だんな、その永山、自殺かもしれませんね」

勘助のつぶやきに、山風は虚を突かれたふうに、

「勘坊、どうしてそんなこといえるんだ」

「勘、動物の勘、ですよ。

バイクに乗ってるとき、突然わけもなく、ホント、わけなんかないんだ、凶暴になることがある、滅茶苦茶にしたくなる、世間をじゃなく、他人をじゃなく、自分をさ。

そのヤバイ誘惑をさ、こらえながら乗っていることがあります」

「むむむ、こわいな、変態だな、勘坊も【死んだる団】予備軍だな」

「やなこといわないでくれよ。

うしろにだれか乗せているときは、これでも安全第一です」



このとき、麻布署にいつている花井健太刑事から、山風宛に電話がはいった。花井の声はやけに興奮していた。

「ええ、猟奇事件の被疑者にまちがいありません、兄貴の勇太が自白させました。

立花雪絵、二十五歳、元社長秘書、住所は不定ですが、マンスリーマンションを利用していたようです。【死んだる団】については、黙秘権を行使しています。

山内参三が、ええあの有名なライターの子内氏が匿っていました、自称恋人とか。

しかしどうも立花雪絵いわく、じっさいは無関係のようで、すぐに釈放されました。

たとえなにかあっても、あれほどの有名人ですから、逃げも隠れもできない。

いやはやしつこくて、いや山内氏ではなく、〈日刊スコープ〉の小金井という記者が、いまもまつわりついていて。

本格的な取調べは明日からですが、山内氏が相当てごわい男でして、弁護士をつけるといって、そうです、本人ではなく立花にです。

ホントに恋人かもしれません。

その弁護士が、なんとあの新川次郎ですよ、とにかくホシをみんな無罪にしちゃうんだから、こまった弁護士で、山さんもずいぶん痛い目にあっているでしょ。

問題はそれだけではありません、厭になっちゃいますよ。

【死んだる団】事件は、麻布署の寒崎武士警部が乗りだすそうで、はいはい、山さんが山形にとばされるきっかけをつくった、あの寒崎さんです。

つまり、僕も山さんも、まあちょっとその、うごきが制限されます。

立花雪絵を逮捕したのは兄貴の勇太、つまり麻布署なわけで、まあその、もうこちらにくる必要はないと。

報告が終了次第、僕も新宿署へもどります。

まあ決定したことですから、不本意ですがしかたありません、あとは兄貴の勇太にまかせればと。

そうそう、栃木県警でも、【死んだる団】ふうの、松本大海という若者が保護されています。

寒崎さんは、久遠寺の事件も【死んだる団】ではないかと疑っています。

高杉京平、藤上吾郎、辻中亀夫、立花雪絵、松本大海。立花と松本は手の内ですから、解決は時間の問題でしょう」

(そんなに簡単ではない)

と山風にはおもわれた。

どうして簡単でないかは、問われても刑事のカンとしかいえないだろうが。

四日、午後九時。

山内参三は、麴町の新川次郎弁護士事務所にいる。

山内は麻布署に釈放されてから、歩いて十分の麻布十番のマンションにもどった。

あまりにもはやく解放されてしまったので、しばし夢かとおもったが、悪夢でも善夢でもなかった。

郵便受けに舟木英介からの簡易速達がとどいていて、その内容の生々しさは、現実に山内をつよく引きもどしたし、部屋にはいると、立花雪絵といっしょにつついた牡蛎鍋の残滓が冷たい臭気をはなっていた。

雪絵がつかった箸や茶碗もそのままだった。

山内自身がながした血が床で黒くかたまり、風呂場には（後で麻布署が押収しにくるはずの）雪絵の血まみれのドレスもあるはずだった。

電気ストーブはつけっぱなしで、そのあたたかさは雪絵のからだの芯のぬくもりかともおもえた。

山内は花井勇太刑事になんども口ばしした、自分のセリフ（「じつは恋人なんだ」）を想いおこし、新川弁護士に電話をいれると、相手の迷惑もかんがえずに、すぐにとびだしたのだった。

新川次郎は、早稲田大学の法学部で一年後輩だった。

新川は優等生だったが、劣等生の山内には頭があがらなかった。

酒も、女も、賭け事も、新川は山内からおそわった。

『六法全書』を三か月で丸暗記する方法も、『資本論』を三時間で読破する方法も、新川は山内からおそわった。

新川が失恋して発作的に神田川にとびこんだとき、命がけで救ってくれたのも山内だった。

山内から詳細に、ことのなりゆきをきかされた新川は、

「先輩、その女性に惚れましたな」

眼鏡をはずして、オールバックの髪に手を当てると、ひとしきりうなった。

「そんなことはいい、どうだ、協力してくれるか、いや、協力するだけでは駄目だ。

立花雪絵を無罪にしてくれ」

長いつきあいで、山内は初めて後輩に頭をさげた。

「無茶ですなあ、先輩」

「おまえは無茶が得意じゃないか、何十人も無罪にしているじゃないか」

「それは無罪にできるだけの要件があるからですよ。

この事件がいかに複雑怪奇か、先輩がいちばんわかっておるはずですよ」

「そりゃ、わかっておるよ」

山内は新川の口ぶりを真似した。

山内の口調の裏には、「だからどうした」という威圧が見えかくれしていた。

「先輩後輩の友情に、亀裂がはいる可能性大ですな」

「記憶力減退か、学生時代おまえにおしえただろ、友情より愛情だってな」

「先輩、やはり惚れましたな」

「莫迦いえ、女房には逃げられたが、おれには年ごろの娘がいる。

おれはただ一宿一飯の恩義というやつで」

「一宿一飯の恩義は女のほうのせりふですな、先輩の立場としては、殺されなかった恩義というべきですな。

それにしても、先輩のご立派なイチモツはよくもまあご無事で」

「立派でないから無事だったんだ。

おまえは昔から一言おおい、よく弁護士やってられるな」

「記憶力減退ですな、先輩のおしえを守っておるんです、これからの弁護士は一言おおいにかぎる」

山内はとぼけて、

「立花雪絵の犯罪には、なにかおおきな、見えない動機がある、それを突きとめれば、活路がひらける気がするんだが。

おっと、そうではない、ひらけひらけ、ゴマでもなんでもひらいて、無罪にしろ」

「とても法科をでたひとの言葉とはおもわれませぬ」

「おれは中退だ」

「いまかんがえられる手としては、女に狂人になってもらうんですな。

無罪は無理でも、なんとか死刑は免れる。

阿部定だって監獄からでられたんですからな」

「なんでもいい、とにかく無罪にしろ、金はいくらでもだす」

「よくもぬけぬけと。

先輩の金欠病は、都民の噂の的になっております」

「ではいいなおそう。

金はだせんが、無罪にしてやってくれ」

山内は後輩の前で、初めてするしぐさを見せた。

両掌を合わせたのだ。

「無罪無罪って、先輩は女を自由の身にさせて、こころおきなくベッドインしようって魂胆ですな」

「こころぐるしくベッドインだ」

「いいですか先輩、男がふたり殺されておるんです、いや洗えばもっと前科がありそうだ。

どうやら、男たちには罪がない、拉致したわけでも、レイプしたわけでもなし、ただ人並に助平だっただけで、あるいは蛮勇があっただけで。

男たちにも家族があったでしょうに、先輩の話をきいておると、なんか【死んだる団】の発想に似てやしませんか。

身勝手に、自己中心的で、謙譲の美德というものがありませんな」

「厭なこというねえ、おまえはいつから検事になったんだ」

「敵をしり己をしれば百戦あやうからず、これは先輩の口癖でしたな」

「ごたくはいい、無罪にしてくれるのか」

「先輩の心情は、むかしからわかっております」

新川はじつに渋い顔をした。

「やるのか、やらないのか、ふたつにひとつ」

「引きうけりゃいいんでしょ、無罪にすればいいんでしょ、厭な先輩をもった宿命ですからな」

新川はもっと渋い顔をした。

けれども新川にはこのとき、

(大切な先輩に、大恩をかえすのは、いましかない)

とかんがえていた。

新川は、弁護士生命をかけて、山内を助けることを決意していた。

四日、午後九時半。

寒崎武士は、花井勇太刑事を前に、身ぶり手ぶりよろしく、指示をあたえている。

「明朝、栃木県警から松本大海という青年が護送されてくる。

自殺志願者ということで保護されたのだが、どうもその口ぶりからして、【死んだる団】の一員かもしれない、しかも京都での殺人をほのめかしている。

いいか、この松本と立花雪絵を会わせるんだ。

いや、マジックミラーではない、面会でもない、偶然を装うんだぞ、そうでないと、おたがい、しらんふりをする可能性がおおきい。

そうだな、廊下ですれちがいさせるのがいいだろう。そして松本と立花の反応を見る、いいな、これが大切なことなんだ、松本と立花が顔見知りなら、まちがいなく松本も【死んだる団】だ。

とにかく立花は黙秘権をつかっている、強情な女だ、山内参三が依頼するはずの新川次郎弁護士いがいとは、決して口をきかんだろう。

むこうがそのつもりなら、こっちにも対応策があるってことさ、立花本人のことも【死んだる団】のことも、松本からききだせばいいんだからな、まず、松本をたたく。

君もごぞんじのとおり、若い男はすぐに落ちるからな、それからじっくり、立花を落とせばいい、わかったな」

「了解しました、警部、でもなにか、映画みたいな手ですね」

「みたいな、ではない、おとし観た映画がヒントさ。犯罪映画を参考にするのは、犯罪者ばかりではない」

「もしかして、あのフランス映画でしょう、僕もたまたま観ました、家内がアラン・ドロンのファンなもので」

「だが君はどちらかという、チャールズ・ブロンソンに似ているな」

「いえ、ブロンソンに似ているのは、双子の弟の健太で、僕はジャン・ギャバンに似ていると、家内はっています」

「見る目のある奥さんだ」

「でも、あの映画では、警察側がしてやられる。

すれちがうふたりは、おたがい見ず知らずの他人のふりをするんですよね」

「まあな、だがそれは、おととの映画の話だ。

ことしの現実の話では、警察側の勝利だ。

松本と立花は、ドロンのブロンソンではないんだからな」

「そのとおりです、寒崎警部に恥はかせません」

「よくぞいった、頼んだぞ」

「万事おまかせを」

花井勇太刑事は、大袈裟に敬礼をして見せた。

寒崎武士警部は、入歯の大口をあけ、野武士さながら高笑いをした。

二月五日、午前八時。

舟木英介は、まだ京都の旅館〈かわらや〉にいる。

自分でも内実がわからない心残りがあり、ぐずぐずしていたら、(往診の医者いわく) 肺に湯水がはいったせいで肺炎になった。

高熱を發した舟木は、(番頭に用意してもらった) かいまき蒲団にくるまっとうなされ、手足をばたつかせている。

夢のなかで、巨大な醜い餓になっているのだ。

《天井に十円玉くらいの穴があいている。

そこから、艶めかしい虹色の光がさしこんでいる。

(舟木の) 餓は、そこを目指して、ぶ厚い羽を必死でばたつかせる。

金色の粉がとびちり、虹色の光にてらされて、乱反射している。

ちょっとみとれていると、落下しそうになるので、またつよく羽をばたつかせる。

穴は目前にあるが、羽がつかれてくる。

寸前のところで、餓は落ちる。

再び羽をばたつかせる。

また寸前のところで落ちてしまう。

なんどもくりかえし挑む。

だが、なんどやっても力およばず、穴のむこうをのぞくことができない。

焦りが生じる、なんとしても見たいのだ。

あの穴からなら、どうしても見たい人間がのぞけるはずなのだ。

しかし餓には、見たい人間がだれなのかわかってはいない。

餓は自問する、ぼくはいったいなにをやっているのだ、穴のむこうにだれがいるのかをしらずに、死ぬおもいで羽をばたつかせている、徒労だ、愚行だ、まるでシジフォスの神話だ。

ぼくが見たいのは、川上真希なのか、それとも穴のむこうにいるのは、朝山完吉殺害の犯人なのか、それでは辻中亀夫か、いや亀夫が犯人だという証拠はない。

もしかすると、松本大海が殺ったかもしれないではないか、ぼくを殺そうとした大海。

こんなつかれはてた餓を殺して、なんになるというのか。

そうだ、大海はもう自殺しているかもしれない、ぼくを殺したと信じている大海の、目的は達成されているのだから。

だがぼくは、どうして警察にとどけなかったのだろう、とどければ、大海の自殺はくいとめられたかもしれぬではないか。

ぼくはおそらく、大海の死をのぞんでいたのだ。

大海が死んだとなると、穴のむこうのあの天国さながらのところにいるのは、大海にちがいはない。

それなら、ばたつくのはもうやめよう、二度とあの筋肉質のからだは見たくない。

もし裸を見るなら、マリリン・モンローにかざるからな。

それでもぼくは、大海をさほどうらんではいない。

なぜなら、大海と真希は、いっしょに死のうとするくらい愛しあっていたかもしれないが、いっしょに生きてゆくほどには愛しあっていなかったからだ。

どういうわけか、餓はこりずに挑む。

しかしなんどやっても駄目だ。

餓は羽をばたつかせながら、溜息をつき、自分が落下していく先を、うらめしそうに眺める。

そこには、かいまき蒲団にくるまって、あがいている男がいる。

汗まみれの顔じゅうをゆがませ、歯ぎしりをしているだれかに似ている男。

嗚呼、ぼくの親父に似ているんだ。

事業に失敗し、毒を飲んで自殺した親父の、死ぬまぎわの断末魔の顔に。

餓は落ちてゆく、ゆれながら落ちてゆく。

ばたつく力はもう残ってはいない。

男のうえに、かいまき蒲団のうえに、落ちてゆく》

舟木英介は目を醒ました。

しばらく天井の羽目板を見つめていた。

どこにも穴はあいていなかった。

とぐろを巻いた木目が、暗い宇宙におもわれた。

舟木が自分の額に手をやると、冷たい。

熱がさがっているところをみると、医者は大袈裟にさわいだか誤診したのだとおもわれた。

舟木はおきあがり、(番頭に用意してもらった)どてらを着ると、べつだんなの目的もなかったが、ふらふらと部屋をでた。

廊下で旅館のおかみと鉢合わせになった。

おかみは皺だらけの顔を紅潮させていて、かなり若く見えた。

「いま様子を見にきたところですねん」

「おかげさまで、もうだいじょうぶです」

「そうそう、さきほど朝山先生のぼんぼんが見えられて、舟木さんおらひんな

ら、なにぶんよろしうと」

「そうですか、さぞかし気を落とされているでしょう」

「自分で頭をそってはってね」

「それはどういうことですか」

「親しいもんからきいたんやが、葬儀がおわりましたら、ご両親の位牌をもって、托鉢の旅にでるそうやて」

「そうですか、お坊さんになるのですね」

いっしゅん舟木の脳裡に、それは自殺の代わりとしての出家なのではないか、というおもいがよぎった。

「ぼんぼんが小学生のときからしってます。

善吉はんという名前のとおり、ほんま善い子でなあ、しかも利発でなあ、末は博士か大臣かといわれておりましたな、お父上を越えるのではないかっていう人もおりましたな。

かわいそうでなりしまへん」

おかみは目頭をおさえたかとおもうと、つと目をあげて、妙な笑顔をつくった。

「北山極齋画伯が京都にきなはるんですって、すごいわあ」

「すごいかねえ」

「号一千万ですと、だれかがいってはったわ。

あたしもなにか描いてもらいたいわあ。

いま〈日本の花シリーズ〉の制作していなはる。

それでね、こんどは京都嵯峨野の花ですと」

「嵯峨野の花ねえ、雪だらけで花なんか咲いていなかったけどね」

「雪も花みたなもんやおまへんか」

「なるほどねえ」

舟木を感心させたおかみは、一冊の薄い雑誌を、黄八丈の襟のあいだから取り出した。

京都のPR誌だった。

おかみに手わたされて、舟木は立ったままページを開いた。

冒頭から、北山極齋と、気鋭の美術評論家高田一生との対談が載っていた。

顔写真はなく、そのかわりに極齋の絵が、カラーで一枚載っていた。

『江ノ島と花』と題するその絵は、名の知らぬ朱色の花が一輪描かれているだけで、江ノ島は絵のどこにも見えなかった。

その花はどこか、首を吊った長襦袢の女に似ていた。

番頭に呼ばれておかみが去ったので、舟木は対談を読みはじめた。



高田○ところで先生、こんどは嵯峨野ですか。

北山○はい、〈かわらや〉という旅館に泊まるつもりです。

親友の朝山完吉教授が定宿としてつかっています。

二月上旬に京都にむかい、下旬には描きあげるつもりです。

高田○あの名画『江ノ島と花』を超える作品が期待できますね。

先生、前におっしゃっていましたね。

この花のうしろの白いところが、江ノ島だと。

そのとき文字通り、目の前が真っ白になりました。

まだ美術評論家として半人前だと。

見者の道は、はるかなりです。

北山○絵を描くのは、肉体です。

絵を観るのも、体でなければなりません。

肉体を賭けた精神でなければ、だれも信じることはできない。

小生は、苛酷な世界で絵を描いています。

そのために、絵を観る方にも苛酷を強いるのです。

高田○わかります、なんとなくですが。

ところで〈日本の花シリーズ〉も、今回で最後。

ということで、先生のふるさと湘南江の島からはじまりました。 日

本のふるさと京都嵯峨野でおわるのですね。

北山○ニーチェは、死ぬ時期を誤らぬこと、といいました。

高田○なにをおっしゃるんですか、先生はまだお若い。

画家は惚けてからが勝負だというのが持論ではありませんか。

北山○たとえ話です、引き際がかんじんという意味です。

いまの政治家などにも通じる話です。

高田○安心いたしました。

どうしてここ数年、花ばかりお描きになっているのですか。

北山○それは美術評論家の方が推察なさればいいことです。

ただひとつだけ、小生にもわかっていることがあります。

花は、散るからです。

花は、小生に死というものをかんじさせてくれます。

花という字は、死という字に、よく似ているでしょう。

高田○気がつきませんでした。

花の命は短くて苦しきことのみ多かりき、ですものね。

北山○苦しきも、よろこびとかわりません。

人生、夢まぼろしのごとくなり。  
一億光年の時間のながれをおもってください。  
人生五十年、いえ百年でも、いかほどのものでしょう。  
まさに、いっしゅんです。  
花のように散るのが、人間です。  
それでも根があれば、また咲きます。

高田○小林秀雄が書いていますね。

花の美しさなんかない、美しい花があるだけだ、と。  
先生はどうお考えですか。

北山○小生は、その言葉をこうとらえています。

学問がはいりこんだとき、芸術は消滅する、と。  
小生の絵をころから理解し愉しんでくれる人はだれでしょう。  
おそらくあなた方美術評論家ではないでしょう。  
じつは、『江ノ島と花』は、だれかに盗まれてしまいました。  
もしこの泥棒さんが、金銭に替えるために盗んだのではない。  
自分の部屋に飾って毎日観たいから盗んだんだ。

そういったとしたなら、この人こそこの絵の最大の理解者です。 画  
家としても、我が意を得たりということでしょう。

高田○手厳しいご意見ですね、おそれいりました。

おそれいりついでにひとつおねがいです。  
対談の記念として、色紙をいただけるとありがたいのですが。

北山○記念になるかはわかりませんが、おやすいごようです。

絵ではなく書でよろしいでしょうか。

高田○先生の書も垂涎の的です。

あらら、ずいぶんお早いこと。  
花、より、ほかに、知る、人、もなし。  
こういうことでよろしいでしょうか。  
ありがとうございました。

読み終えて舟木は、喉の奥でつよくうなった。

遠くにいた番頭が、こちらを窺ったくらいだった。

舟木はまず、北山極齋画伯が朝山完吉教授と親友だという点に驚き、同時に  
奇異なかんじをいだいた。

それから、極齋が花と死を結びつけている点に、好奇心をもち、併せてやはり  
奇異なかんじをいだいた。

絵には興味も造詣もない舟木だったが、極齋に会ってみたいとおもった。

舟木はこころの底の底で、もしかすると極齋も【死んだる団】なのではないかと、疑心暗鬼になっていた。

そのとき、おかみが小走りでやってきた。

東京から電話がはいっているとのことで、舟木は山内参三ではないかとおもった。

受話器をとってみると、山内ではなく、松本玄信の秘書の木下弁太郎だった。

木下は挨拶もそこそこに、舟木の居所は山内さんからきいたと告げ、また松本先生のボディガードの仕事に依頼したいと、早口でまくしたてた。

五年前に舟木は、松本玄信のボディガードをやったことがあって、松本の身代わりに暴漢に脇腹を刺され、全治三か月の重傷を負っていた。

舟木は脇腹に痛みをかんじた気がし、さらに岩風呂の湯のにおいを嗅いだ気もした。

「ぼくはいま病人ですから、お役に立てません。

そうですか、松本先生はこれから発つんですか、ああ、飛行機でね。

そうですか、京都駅前で演説を。

なんですって、天皇陛下を京都へ。

いわゆる遷都というわけですか。

いくら真の文化の象徴という考えはあっても、そんな危ない演説をする人の、ボディガードなんか、だれがやるというんですか。

そうでしょう、そうでしょう、だれもやらないから、ぼく、ですか、いや、ぼくより適任がいますよ、ぼくより百倍は強い、不死身の男です、麻暮、正作。

ああ、そうですか、松本先生が、ぼくをご指名。

前金で、五百万、ですか、冗談でしょう、たった一日ですよ。

なるほど、たしかに詐欺なんかできるお立場ではありませんね。

そうですか、報酬の高さは、危険度の高さと、比例するってことでしょうね。

とにかくかんべんしてください、金はほしいですが、命も惜しい。

はい、妻子はまだおりませんが、それとこれとは別のことで。

そうそう、別の依頼でいまうごいているところでして、手も足も自由にはありません。

それに木下さんもおぞんじでしょう、ぼくは身代わりになることはできても、相手を倒したり捕まえたりするほどの、特技はもちあわせてはおりません。

ええっ、そこがいいんですと、松本先生が。

ええっ、松本先生にはもうそのおつもりなのですか、困りますよ、もしかして、ぼくがこんどは死ぬのを、望んでいたっしやるとしかおもわれません。

もうしわけありませんが、やれないものはやれません」  
そういうながら舟木は、請け負う決心をしていた。

五日、午前九時。

山本久治は、〈日刊スクープ〉本社デスクで、ふたたび怒り狂っている。  
一升瓶二本はとうに空けられ、部下が差しいれた三本目も残りすくなくなっている。

血走った目は、目の前にいない小金井豊にむけられている。  
「小金井は、いったいどうしたんだ、俺は一睡もしないで、待ちつづけたんだぞ、なのに、小金井は一行の記事すらよこさない。

立花雪絵の単独会見なぞと、偉そうにほざきおって、なんたるざまだ。  
社長賞どころかボウヤ賞もやれん、本社どころか、沖縄に出向だ、いんや、クビだ。

ななな、なんだと、小金井が名古屋に帰っちまっただと。  
どういうわけだ、都落ちか、よろしい、だれか、落ち武者狩りにいけ、首尾よく小金井の首をとってきた者には、局長賞だぞ。

むむむ、小金井のくそつたれめ」  
山本編集局長は、パイプの柄をぎりぎり噛みくだいた。  
（新川次郎弁護士に頭をさげられ、事情をきいた小金井豊は、立花雪絵との単独会見を中止し、いさぎよく名古屋支局にもどったが、クビにはならなかった。  
それどころか、この年三月の〈日航よど号ハイジャック事件〉に関するスクープで、〈日刊スクープ〉社長賞の榮譽に輝くのだ）

五日、午前十時。

寒崎武士は、麻布書の一室で、花井勇太から報告をうけている。  
「ということは、松本大海はやはり立花雪絵を知っていたんだな。  
よし、案の定だ、松本も【死んだる団】だ」  
寒崎警部は、してやったりの顔で、両掌をなんども打ちあわせた。  
花井刑事は申し訳なさそうな表情になって、  
「じつは、それが、どうやら人違いで」  
「意味がわからん」

「いま報告した通り、松本は立花とすれちがいざま、たしかに名前を呼んだのです。

しかし立花でも雪絵でもなく、マキさんと呼んだのです。

立花のほうは、松本の呼びかけに反応もしないし動揺もありません。

したたかな女だとおもいました、そして、立花雪絵は仮名で、マキなんとか、もしくは、なんとかマキというのが実名ではないかと疑いました。

もちろん、あがったばかりの立花雪絵の素性調査書を、逐一見てみました。

すると、雪絵の腹違いの妹に、川上真希という者がおります。

現在行方不明中とのことですが、この女性が、姉によく似ているとのことです。

松本はまちがいなく、雪絵を真希だと錯覚してしまったのです。

松本本人に、あとで雪絵の顔写真を見せました。

よく似ているけど別人だと、松本はつぶやいておりました」

花井刑事の説明に、寒崎警部はしきりにうなずいた。

落胆した様子はまったくなかった。

「そうか、わかった、しかし、これは、くさいぞ。

いいか、立花雪絵はまちがいなく【死んだる団】だ、松本大海は仮定【死んだる団】だ。

その松本大海が、立花雪絵は知らずとも、その妹の、川上真希さんを知っていた。

これを偶然とおもえるか、なあ、花井君」

「まったくです、どうしますか、警部」

「いずれにしても立花雪絵は黙秘権をつかい、弁護士はあの切れ者の新川次郎だ、松本大海はすぐにも釈放しなければならないが。

いいか、松本大海に刑事をふたりつけろ、尾行するんだ、けっして見のがしてはならない。

松本大海が【死んだる団】だとしたなら、かならず尻尾をだす。

そして川上真希さんという女性が、もし松本大海の彼女だとしたなら、かならず会いに行く。

川上真希さんから事情聴取することによって、立花雪絵の本性も、裏もわかるかもしれん」

「裏、とは」

「きまっとるじゃないか、【死んだる団】の黒幕だよ。

立花雪絵は単なる枝葉にすぎん」

「おそらくそうでしょう」

「気をつけなければならないのは、松本大海に自殺されることだ」

「了解しました、尾行の役目はぜひ、この花井に命じてください、といたいところですが、面がわれています。

新宿署の弟をつかってもらえませんか」

「そういうとおもったよ。

しかし折り合いがつくかどうか」

寒崎警部は入歯でかるく歯ぎしりをした。

そのとき花井刑事の後輩の山下刑事がはいってきて、寒崎に近寄り囁きはじめると、寒崎の顔色があきらかに変わった。

「なに、松本大海が、松本玄信先生のご子息だって、それは本当か」

「秘書の木下弁太郎さんから連絡がはいりました。

あとで身柄を引き取りにくるそうです」

山下刑事の言葉に、花井刑事はおもわず大声をあげる。

「なら、【死んだる団】の黒幕は、もしかして」

「花井君、めったなことを口ばしるんじゃない。

そうか、それで松本大海は、自分の本名は荒野大海だといいはっていたのか」

「荒野って、だれですか」

「以前きいたことがある。

松本玄信とは政治家名で、本名は荒野何某とか」

「そうですか、ややこしそうですね」

「なんだかよくわからんが、なにか意味があるのかもしれない。

とにかく尾行はできなくなったが、もろもろの事情は、山風順一刑事と花井健太刑事にも話しておいたほうがいい」

「承知しました」

「万一、松本玄信先生が、なにか関係しているとなると、やっかいだな、この事件は一筋縄ではいかなくなる」

寒崎警部は、また入歯でかるく歯ぎしりをした。

五日、午後二時。

舟木英介は、嵯峨野の清水印刷の裏の、ほったて小屋の前にいる。

現場検証のすんだ小屋は、静まりかえっている。

ここで辻中亀夫と会見し、朝山完吉の死に遭ったことなどが、ずいぶん昔のことにおもわれた。

「無駄足をふんだかな」

我しらず舟木はつぶやいていた。

頭のどこかに、なにかいいしれぬ霞めいたものあって、舟木は〈かわらや〉の番頭に無理をいって、小型トラックでここまで送ってもらったのだ。

しばらく舟木は、小屋の粗末な外観をぼんやり眺めていた。

霞は晴れない。

とつぜん陽がさしてきて、うすく雪が積もったトタン屋根のてっぺんが赤くなった。

赤い雪は、舟木のところに、なにものかを放射した。

郷愁ではない、自然美でもない。

それは、血なまぐさい不安だった。

「おかしい」

舟木は声をはなった。

太陽のせいではない。

それは、あきらかに、炎だった。

小屋の屋根から、炎がでていいるのだ。

舟木が前進すると、小屋のなかから、初老の男がとびだしてきた。

肩幅がひろく、いかつい顔をしていた。

どういうわけか、日本刀を手にしている。

男の足もとがおぼつかないので、舟木は酔っぱらっているのかとおもったが、よく見ると、目が不自由なのだ。

男は、その見えない目で、炎を見あげている。

ためらいつつも、舟木は男に声をかける。

「火事ですよ、水道はどこですか」

「だれじゃ、おまえは」

男は居丈高に叫んだ。

「それよりも、火を消さないと」

「その必要はない、この小屋はわしのものじゃ。」

おのれがつけた火を、おのれが消す阿呆がどこにおるんじゃ」

するとこの男が、清水印刷の社長清水清なのかと、舟木はあらためて見つめた。

そして、火の熱さに顔をゆがめながら、名をのる。

「ぼくは舟木英介というものです」

「嘘をつくんやない」

「嘘ではありません、辻中亀夫さんと会見もしました」

「いんや、舟木なら、わしが殺したはずじゃ、首をはねたはずじゃ」

「なんですと」

(そうか、そうだったのか)

舟木はこころのなかでも、驚愕の叫びをあげた。

(朝山完吉先生は、ぼくのかわりに殺されたのだ。

なんということだ、偉大な思想家が、つまらぬ人間のかわりに、つまらぬ人間のために、殺されたんだ。

目の見えない清水清は、ぼくの首をはねたつもりだったのだ。

いったいどうしたことだ、松本大海に命をねらわれるのはわかるが、清水清にもねらわれていたとは)

「どうしてなんです」

舟木が咳きこみながら質すと、清水は手にした日本刀を、手慣れたうごきで上段に構えた。

「亀夫さまに危害をあたえる者は、だれであっても、殺す」

いかつい顔が、いっそう凄まじい形相になった。

「ぼくは、亀夫さんに、危害をあたえるつもりなんかなかった、そんなつもりで、東京からきたのではありません。

もし清水さんが、聞き耳をたてていたとしたなら、よくわかっているはずす」

「なんとほごこうが、駄目や、わしには、すべてが見えるんじゃ。

この目のおかげで、他人の殺気を見のがすことはない」

清水が舟木に、一步二歩と寄ってきた。

炎はトタンをこがし、柱が燃え、はじける音と、溶けた雪が屋根からすべりおちる音が、重なった。

清水はしだいしだいに近寄ってくる。

とても、目が不自由な人間の、足どりではない。

舟木は後ずさりし、枯木をひろった。

だが、枯木では相手にならないとおもった。

たとえこちらが日本刀で、あちらが枯木でも、脳天を打ちくだかれそうだった。

「どうして放火なんかしたんです」

舟木の問いに清水は答えず、

「どうや、雪のなかの火はきれいじゃろ、わしには、よう見える」

「あなたもやはり【死んだる団】なんですな」

それにも答えず、



「わしは目がくらんでおった、いまのあんたにや、殺気をかんじゃない。

おそろくわしは、まちがえて、あんたの連れを殺したんじやろ。

いんや、まちがいではない、わしは、あんたの連れに殺気をかんだんじや、結果的には、わしはわしの役目を果たしたことになる。

それでもわしは、あんまり長く下にいたせいで、上にいるみたいな気分になってきたんじやな」

清水は構えた日本刀を、静かにおろした。

そして、清水は狂った。

ほんとうは、狂ったわけではない。

けれども、舟木には狂ったとしかおもわれなかった。

まず清水は、日本刀をふりまわして、踊りはじめた。

剣舞らしかったが、剣舞と異なるところは、清水が、ふりまわす日本刀の切先が、つぎつぎと自身の五体を傷つけることだった。

清水は、左手から血をながし、右足から血をながし、胸から血をながし、顔から血をながした。

そして、首からも血潮が吹きでた。

「やめろ」

と舟木は叫んだが、もはや耳にとどいている様子はなかった。

清水は、踊りのしめくくりとして、日本刀を臍の部分に渾身の力で突きさすと、串刺しになったまま、両手をあげた。

「【死んだる団】バンザイ」

そして清水は、よろけながら前のめりに、炎のなかへとびこんでいった。

その直後、屋根が烈しい音をたてて崩れおち、火柱があがり、熱風が舟木をおそった。

五日、午後三時。

山風順一と花井健太は、松本大海を尾行するために、麻布署の外にいる。

寒崎警部は、大海の尾行は無理だとかんがえていた。

が、(松本玄信の秘書の) 木下弁太郎は、大海の身柄引き取りがすんだら、すぐに京都へ発つという情報がはいったので、急遽、花井勇太刑事に命じて、正規の段取りは無視して、新宿署の花井健太刑事に連絡させたのだった。

花井健太は、山風刑事に相談し、いっしょに尾行をすることにした。

松本大海に形式的に詫びる寒崎警部に対して、大海はひとこと、『不可解』と

いったらしい。

そのことを兄からきいた花井は、どうして『不愉快』とか『不本意』ではなく、『不可解』なのだろうと、疑問におもった。

東大の大学院生だという大海が、言葉をまちがえるわけがない。

それなら、『不可解』とは、どういうことなのだろうと、花井はかんがえつづけていた。

大海は麻布署の前で、木下と別れると、すぐ近くの（六本木界限では最も大規模な書店である）〈ブックセンター〉にはいった。

山風刑事が入口を見張ることになり、花井刑事は大海に尾いて、書店内にはいった。

大海は奥にすいこまれ、文学関連の書物が並ぶ区域へとすすんだ。

そして立ち止まったのは、三島由紀夫のコーナーだった。

ひときわ華やかな装幀の新刊本が平積みされ、棚にも三島の既刊本や文庫本の数々が整然と収められていた。

大海はそこに長い間、おそらく一時間ほども立ちつくしていた。

本を手にするのではなく、三島の小説の背表紙や評論集のカバーなどをながめていた。

『憂国』とか『英霊の声』とか『太陽と鉄』といったタイトルが、花井の目にもはいった。

けれども花井は、ほとんど大海の背中を見つづけていた。

大海の背中が数ミリゆれると、花井の背中も数ミリゆれた。

(それにしても、ものすごい背中だ)

と花井はあきれていた。

(まるでプロレスラーじゃないか)

おそらく木下が持参したのであろう、厚手のセーターにつつまれていても、花井には大海の肉体が透けて見えた。

(もしなにかあったとして、山さんとふたりがかりでもとりおさえることができるだろうか。

それとも日光で拘束した様に、拳銃をつきつけるしかないのだろうか)

花井はこみあげてくる不安感を、あえて深呼吸をして抑えた。

花井の鼻息がきこえたのか、大海がふりかえった。

花井は焦ったが、大海の視線は、花井を見てはいなかった。

花井のうしろの本棚に、大海は目をやっていた。

花井を無視して本棚に歩み寄ると、大海は一冊の文庫本を手にとった。

そしてその文庫本をズボンの後ろポケットに押しこむと、なにくわぬ顔でレ

ジを素通りした。

表にでると大海は、タクシーをひろった。

花井と山風も、タクシーをつかまえて追った。

「ずいぶんと長かったねえ」

車中で山風は、不満声をだした。

「しかたありません、長いのは僕ではなく、大海なのですから」

花井は溜息をつきながらいった。

「やつは本を買うためでなく、長うんこするためにはいったのかとおもったよ」

山風が冗談をいっても、花井は真顔をくずさずに、

「長うんこが好きかはしりませんが、大海は三島由紀夫のファンのように」

『楯の会』にでもはいるつもりなのかな」

「なにせあの肉体ですから、三島が嫉妬して入団拒否されるでしょう」

「おれは、なにせあの肉体をまだ拝んではいないがね」

「そういえば、文庫本を一冊、万引きしました」

「花井君、刑事たる者が、なにをやってるのかね」

「万引きは僕ではなく、大海ですよ」

「それはわかっているよ、刑事たる者が、どうして大海を現行犯でつかまえなかったのか、ときいているんだ」

「文庫本が大事か、【死んだる団】が大事か、ということです」

「よくぞいった、さすがはおれの相棒だ。

それで大海は『文化防衛論』でも盗んだのかい」

「いえいえ、それが拍子ぬけで。

原口なんとかの、二十歳のなんとか、でした」

「花ちゃんは無知だねえ、任侠映画の観すぎじゃないの、『日本侠客伝』『昭和残侠伝』」

「同じ高倉健でも、僕は『網走番外地』、あれを観て、この世界にはいりました」

「ううむ、異例だ、そういえば花ちゃんも健さんだな」

「よくぞいってくれました、ついでにそのなんとかのほうもいってください」

「それは、原口統三の『二十歳のエチュード』だよ」

「山さんは物知りですねえ」

「原口は戦後すぐに死んだ東大生だ。

じつはおれも、前に話しただろう、山形の永山一郎先生に教わったんだ」

「その原口と三島の共通点は」

「そこまではしらんよ、いや、花ちゃん、これはヤバイぞ」

「山さん、どうしたんですか」

花井は身をすくめて、叫んだ山風の横顔を見つめた。「共通点があった。

原口は自殺した人間で、三島は自殺しそうな人間だ」

「ということは」

「大海は、逗子にいくつもりかもしれないぞ。

原口統三は逗子の海に身を投げているんだ」

「まさか」

花井はそうつぶやいたが、大海が東京駅でタクシーをおり、切符も買わずに改札を素早く通りぬけ、横須賀線の下りホームに立つと、花井も山風の第六感を信じないわけにはいかなくなった。

五日、午後五時。

舟木英介は、嵯峨野をくだっている。

長いあいだ、全焼した小屋を眺めていたが、どうしようもなかった。

清水清の焼死体を、確認する気もおきなかった。

喉がかわいて、腹もへった。

親が死んでも腹はへる、と最近だれかからきいた気がしたが、だれかは想いだせなかった。

なんとかあるきだしたが、なかなか進まなかった。

手と足に火傷を負い、顔に憔悴の色が見える。

こうもつづけて、血なまぐさい不気味な死をまのあたりにし、こうもつづけて命をねらわれると、気が変になってきそうだった。

せっかく大海にやられた被害届をださなかったのに、また京都府警にいかなければならないのかとおもうと、警察ぎらいの舟木には、ひどく憂鬱でもあった。

雪は白かったが、空はすでに黒ずみはじめ、さらに舟木の気分を沈めさせた。

舟木は、松本玄信のボディガードを引きうけたことを後悔しそうになり、ためらいを打ちけすために、自分にいいきかせる。

（ぼくは、依頼された仕事は、どんなにつまらぬものでも、どんなに危険なものでも、断らない主義でやってきた。

だからこそ、こんなに平凡なぼくでも、私立探偵として、あの天才麻暮正作の後継者などといわれたこともある。

たとえ二度あることが三度あっても、いや十度あっても、因果なことに、これがぼくの仕事なのだ。

まして生活面からかんがえても、いまのぼくは依頼を断れる身分ではない。

このままでは、お金持ちの山内参三さんからだって、金は受けとれない、〈かわらや〉の宿賃だって重なるいっぽうだ。

おもってみれば、ぼくの生き方や考え方からすると、松本大海よりもぼくのほうが、危険人物かもしれない。してみれば、川上真希がぼくから去っていった理由がわからないでもない)

それでも舟木は、麓ちかくまできていた。

あと三十分もあるけば、山陰本線の嵯峨駅につく。

このとき、すこし先の道の脇で、人声がした。

やや足早になってみると、十人ばかりの男がいる。

そろいのジャンパーを着ているところを見ると、なにかの工事中におもえた。

スコップやノコギリやツルハシを、手にしている者ばかりだ。

雪をかいたり、木の枝をおとしたり、石をとりのぞいたりしている。

そのみか、新しい木を植えたり、新しい石を据えたりもしている。

何時間も前からやっているらしい。

その三十メートル四方のゾーンだけが、別世界として造りかえられ、まわりの自然とまるで異なっていた。

その工事の指示をしている男が、舟木の目にとまった。

痩せて背が低い、なんの変哲もない小男だったが、寒さ防ぎのせいなのか、頭巾をかぶっていて、サングラスもしているので、顔はまったくわからなかった。

ひどく汚れたブルゾンとズボンに、ゴム長をはいていた。

どこかで見たことのある体型だったので、舟木は想いだそうとつとめながら、男にちかづいていった。

「もうすこしです、がんばってください。

日がおちる前に写真を撮りたいのです、よろしくおねがいします」

男が、あたりに響きわたる声でいった。

けっして威圧的ではない、むしろ慈愛にみちた優しい声音だった。

(くぐもってはいるが) その声にも、なんとなく聞きおぼえがある気がした。

男は、スケッチブックを手にし、カメラを肩にかけていた。

舟木はつと、〈かわらや〉のおかみの顔を想いおこし、

「北山極齋先生ですか」

と静かに声をかけた。

「そうです、極齋です」

と、男は丁寧な返答したが、そのままの姿勢で、右手の木炭をスケッチブッ

クに押しあてながら、また指示をあたえた。

「じつは、ぼくは、さっき、京都のPR誌の、先生の対談を、読んだばかりなのです」

遠慮がちに舟木がいうと、

「そうですか、それはありがとう」

また優しそうな声で応えてくれるので、自然に舟木は問いかける。

「なにをなさっているのですか」

「ごぞんじのように、絵を描いているのです、まだ初期の段階ですが」

「この工事は、なんなのですか」

「これですか、これは、絵に合わせて、風景を変えているのです」

「はあ」

芸術家の精神構造は、自分なぞには見当もつかない、と舟木は半ば感心し、半ば呆れた。

それでも、もうひとつだけ、質問をする。

「〈日本の花シリーズ〉の最後、ということでしたが、花はどこにも見あたりませんね」

とつぜん、極斎の様子が変わった。

極斎はうなだれ、肩をおとし、しばしうなった後に、

「花は、死んだのです」

とつぶやいた。

舟木はもうなにもいえずに、一礼するとその場をはなれた。

京都駅にむかう車中で、ようやく舟木は想いだした。

(そうか、そうだった、北山極斎画伯の物腰と声音は、松本玄信先生の物腰と声音に、よく似ている。

他人のそら似というやつだろうが)

五日、午後五時半。

山風順一と花井健太は、松本大海を尾行して、横須賀線の車内にいる。

運良くラッシュアワー直前の電車だったので、車内は空いていた。

ふたりは、大海からいくつかはなれたシートに座っていたが、腕組みをして目を閉じているらしい、大海の様子がよく見えた。

「どうかしたのですか、山さん」

大海の見張りを花井にまかせて、山風が車窓から外の景色ばかり眺めている

ので、声をかけたのだった。

外は灰色に煙っていて、もうすぐ闇もおりてきそうで、ほとんど見るべきものはないはずなのに。

「ああ、すまん、藤上吾郎のことを想いだしていたんだ」

山風は声をおとして、というよりも声が沈んでいた。

「そうですか、山さんらしくもない、でも、藤上は妙なやつでしたね」

「なあ、花ちゃん、藤上は、おれの娘と同じ年だ。

藤上だけではない、高杉京平も、そして松本大海も、二十歳前後の、まだ前途洋々たる若者だ、どうして自ら死を選ばなくちゃならないんだ、いまは、原口統三が自殺した時代とはちがう。

たしかに、いろいろ問題はおおい。受験戦争、安保、公害、交通地獄、親子の断絶、個人的にとらえても、世界的にとらえても、まだまだいっぱいあるにちがいない、が、平和だ。

おれは小さいときに東京大空襲を体験した。

あのオソロシサに較べれば、とるに足りない問題ばかりなのに、どうしてだ、どうしてこの平和な日本に、【死んだる団】なんてものが発生するんだ。

未来が、明日が、見えないか、いや、戦争中のほうがお先真っ暗だったよ。

おれにはどうしても理解できんだ、白けているやつのほうが、まだわかる」

「山さん、僕もひとこといいですか」

花井も声をひそめていった。

「どうぞ、なんなりと」

「戦争をしているときは、自殺者が極端にすくないそうですよ」

「おれもきいたことあるが、それはどういうことなんだろう」

「つまりその、戦争中は、自殺する必要がない、死がすぐちかくにあるんですからね」

「なら、自殺の原因は平和ってことか、そんな単純なことかなあ、『自殺論』のクラウゼウイツにきいてみたいもんだ」

「もともと人間のこころのなかには、潜在的に死が存在する、そしてあるとき、それが表面化する」

「むずかしいこというね、花ちゃんらしくもない」

「亡くなった朝山完吉教授の言葉ですよ。

前に週刊誌のインタビュー記事で読んだことがあります。

こんなこともいってましたよ、死の問題をかんがえたことがない人間は、非人間だ、自殺をおもいつめたことがない人間は、人間失格だ、他人の死を願ったことのない人間は、宇宙人だ」

「なら、おれは、非人間で、人間失格で、宇宙人か」

「僕もおなじです」

「弱ったねえ、益々わからなくなった」

「頭のよいひとがかんがえることは、ちんぷんかんぷんです。

たぶん、頭のよいひとが、国をよくしたりわるくしたりするんでしょうね」  
ふたりはそろって腕組みをした。

「ところで花ちゃん、朝山先生で想いだしたんだが、辻中亀夫は〈愛信会〉の信者なんだ、それも熱狂的な。

全共闘と天皇陛下と日下典禪教祖とが、辻中のなかでどう結びつくのかおれにはわからんが、京都から帰って、辻中のことを調べなおしたからまちがいない」

「大海ではないが、まさに、不可解ですね」

「おれは、〈朝山完吉殺害事件〉のホシは、辻中ではないとにらんでいる。

となると、辻中は別の大物をねらっていることになる」

「でもどうして、辻中がホシじゃないんですか、山さんからきいた現場の状況からして、辻中でしょう、京都府警もそうかんがえて、辻中を指名手配しましたよね。

それと、辻中が〈愛信会〉ということと、辻中が別の大物をねらっていることと、なにか関係はあるんですかね」

「じつは、いまのところ、なんの関係もない、辻中の無罪の証明にもならないし、別の大物をねらっている証拠にもならない。

しかしだ、くどいようだが、辻中は朝山を殺してはいない、辻中の腕では、ああも見事に首を切り落とせはしない」

「では、だれが殺ったのですか」

「おそらく清水清、嵯峨野の清水印刷の社長だ、三年前にすでに倒産しているがね」

「清水清も調査したのですか」

「京都府警の協力をあおいだ。

清水は盲目だが、神道無念流の達人なのだ。

真面目な苦勞人だが、盲目ゆえに、他人にだまされてばかりの半生らしい。

これは余談だが、清水は同性愛者とのことだ」

「となると、清水も【死んだる団】」

「辻棲はあう」

「では、辻中はだれをねらっているのでしょうか、藤上吾郎の言葉は、嘘とはおもえませんか」



「じつは今朝、大海の父親の松本玄信先生が、秘書の木下弁太郎に先がけて、京都へ発った」

「辻中のターゲットは、松本玄信先生ですか」

「おれのカン、いや推理だ」

「でも」

花井がささやいた。

「でも、なんだね」

山風は身を乗りだし、つられて花井も身を乗りだした。

ふたりは顔を極端にちかづけた。

「〈日刊スクープ〉の小金井豊記者をしっていますか」

「ああ、高杉京平の事件を書いた。号外を読んだよ」

「昨日、その小金井さんと話をする機会があったんですが、小金井さんいわく、松本玄信先生は、北山極斎画伯と同一人物」

「初耳だね、オドロキだね、政財界のドンが、大画伯とはな」

「それだけじゃありません、さらに松本玄信先生は、〈愛信会〉の日下典禅教祖と同一人物」

「なんだと」

山風は声を荒げ、あわててその口を花井がおさえた。

山風がしばし口をきけなかったのは、花井の掌のせいではなかった。

「辻中のターゲットは、松本玄信先生ではないですね」

花井が気の毒そうにいうと、

「おれの推理もここまでか」

山風はつぶやき、白髪まじりの頭髪をかきむしった。

「天は人に、二物どころか、三物をあたえたんですね」

「しかも、政治と芸術と宗教だろ、まさに巨人だな、おれみたいな小人には想像もつかん」

「小金井さんも、巨人だといっていました」

「記者が知っているんだから、全共闘で〈愛信会〉で天皇陛下バンザイの辻中も、当然その事実をしっているだろうな」

「でも」

花井がささやいた。

「でも、なんだね」

山風は耳をすませた。

「万一、その事実を、辻中がしらなかったとしたなら」

「そいつは、そいつは、悲劇、いや、喜劇だな。」

そしておれの推理が適中する、悲喜劇だ」

五日、午後六時。

新川次郎は、立花雪絵との面会をおえて、事務所にもどっている。

それを予期していたのか、チャイムもならずドアがあいて、山内参三が顔をのぞかせた。

「一流弁護士さん、いるね」

「はい、三流ライターさん、いましがたもどったところですよ」

「それで、どんなもんかな」

山内は新川のデスクに手を置いて、せつついた。

「それが、立花雪絵さん、私にも黙秘権をつかっております。

どうやら山内さん以外には、だれとも口をきかないと決意したようすな。

困っております、無罪どころの話ではありません」

山内は、新川のデスクを拳でたたいて、

「口を開くくらいなら死を選ぶ、そうした人間の心理はわかっているだろ。

そこを無罪にするのが、一流弁護士の役目だろうが」

「三流ライターは無茶なことをおっしゃる。

いっておきますが、立花雪絵さんは、ふたり殺しています、死刑が妥当な憎むべき殺人鬼です。

【死んだる団】の連中は、みんな大悪党、私たちは、その観点から出発すべきとかんがえておるです」

「そんなことは、わかっているよ」

「わかっておりません、先輩の口ぶりから察して、立花雪絵さんはもとより【死んだる団】に対して、同情というか、好意すらお持ちと見受けられます」

「邪推だね、おれは連中を客観的に把握しただけさ。おい、コーヒーくらい入れてくれんか」

「無罪にしろなんて、もういわないと約束してくれなければ、一滴の水だっておだしできません」

「ケチ、おまえは臆病風にふかれたのか」

「失礼千万、先輩にはもっと、現状認識してもらわなければ」

「まあいい、おれは宣言するぞ。

おれは、立花雪絵の無罪放免に命をかけるぞ」

「命は他にかけてください、これは冤罪ではないのですよ」

「だが殺されたのは、ただの助平野郎だ。

立花雪絵はまちがいなく、男性不信の神経症、心神喪失者なんだ」

「それは先輩がきめることではありません、それに先輩も私も、おなじ助平野郎ではありませんか。

先輩が男根を切断されなかったのは、たまたま仕事に集中していたからにすぎません。

殺られたのがもし先輩なら、あの世の先輩は私になんとおっしゃるでありますでしょうか。

おい新川、仇をとってくれというにきまっておるです」

「わかった、おれがいいすぎた、どうもおれは正常ではない、おれは恋をしている異常者だ。

なあ、なあ、立花雪絵を助けてくれ、君だけが頼りなんだよ」

「はじめからそうおっしゃればよいのに。

まあ、精一杯努力はしておるです、が、無罪はお約束できかねます」

山内は両掌をあわせて、

「お約束してよ、万一死刑にでもなったら、おれも【死んだる団】にはいって、君を殺して自殺するぞ」

「先輩にはかないません、わかりました、コーヒーをいれます」

「わかってくれたか」

「先輩がコーヒーをのみたいのが、わかっておるだけです。

【死んだる団】にはいりたいのは私のほうです」

新川はキッチンにむかい、その背に山内は声をかける。

「じつは、おれも、無罪なんて、無理だと、かんがえている。

おれは、ただ、覚悟をしたい、それだけなんだ」

(だが、新川次郎弁護士の手腕で、この年の八月、立花雪絵の無罪がきまる。

雪絵は即刻精神病院に入院させられ、翌一九七一年五月退院。

六月、山内参三は雪絵に求婚して、籍にいれる。

ふたりの仲のむつまじさは、友人知人のあいだで、かならず話題になるほどだったという。

そしてこの年の暮れ出版された、山内参三のノンフィクション・ノベル『死んだる団』は、超ベストセラーになるのだ。

翌々年(七二年)雪絵は妊娠する。

けれども子宮外妊娠で、手術も手遅れとなり、雪絵は山内の手を取り、何度も何度も感謝の言葉をつぶやきつつ、永眠する)

五日、午後六時半

山風順一と花井健太は、松本大海を尾行して、まだ横須賀線の車内にいる。

「山さんの推理がはずれたようです」

花井の声に、が首をねじまげると、大海はシートからはなれて、ドア際に寄っている。

鎌倉駅に着いて、大海はおりた。

花井と山風も、あとからおりる。

素知らぬふりで改札を素通りした大海は、江ノ電では切符を買った。

「逗子ではなかったな、どこに行く気だろう」

山風はコートの襟を立ててつぶやいた。

「金額からすると、江ノ島あたりですか」

目のいい花井が、首をのぼしながらいった。

「花ちゃん、大海はたしか岡山の生まれだったな」

「そうですが、麻布署の兄が、大海はああ見えても湘南育ちなんだよといっていました」

「第二のふるさとだとすると、土地勘はあるわけだな」

江ノ電のホームで十分待った。

マッチ箱を想わせる（藤沢行き）江ノ電が、のんびりとやってくるまで、山風は煙草をふかした。

大海はホームの先端に立ったまま、微動だにしない。

空席がおおかったので、山風と花井は坐ったが、大海はドア際に立っていた。

「けっして見のがすなよ」

山風は花井に耳打ちして、自分は何年ぶりかで乗る江ノ電の乗り心地をたのしんでいるふうだった。

だがそれも、はじめの三分間だけだった。

山風は、斜め前に坐っている、異様な風体の男に惹きつけられてしまった。

鼻の下にチョビ髭をはやした男は、黒ずくめのかっこうで、山高帽をかぶっている。

頑丈そうなステッキを立てて、鋭い眼光でまっすぐ前を凝視していた。

男の視線の先には、すでに暗くて見えない海があった。

（この視線は、人を殺しかねない視線だ）

そうおもったとき山風は、『人を殺しかねない視線』と、仲間の刑事がよくいっていた、或る男の名前を想いだした。

男は、長谷駅でおりた。

「いまどき、あんな人が。

まるで映画からぬけだしたチャップリンですね」

花井も、男に気づいていたのだ。

「まさか、麻暮正作氏ではないだろうな」

山風のひとりごとに、花井は顔を寄せ、

「そのマグレって、だれですか」

「天才と呼ばれた私立探偵さ。

もう十年ほどになるのかな、迷宮入りになった、不気味で謎だらけの事件があつてね。

麻暮氏は、ホシと目される荒野大三郎と、外国で死闘の末に、死んだとおもわれていたが、生還した。

最近、また勘坊の兄貴の金助を手下にして、なにかを探っているようなのだ」

「山さん、その荒野大三郎って、松本大海が本名だといっていた、荒野大海の関係者ですか」

「そういえばそうだが、たまたまだろう、たまたまに決まっている」

山風は、自分にいいきかせるふうに応じた。

「その事件、僕に話してくれませんか」

「いいとも、といたいのが、長くなるから、あとでゆっくりとね」

そう山風が答えたとたんに、江ノ島駅に着き、大海はやはりここでおりた。

山風と花井も、とうぜんここでおりた。

大海は大またで海岸ちかくまであるくと、立ちどまった。

大海は長いあいだ、寒風のなかで動かなかった。

「なにをしているんでしょう」

花井が、やや苛立ちながらきいた。

「あの黒い江ノ島を見ているのか、それとも灯台かな」

そう山風は答えたが、じっさいは大海がなにを見ているのかわからなかった。

山風と花井は、大海につきあって、江ノ島もしくは灯台を、三十分以上も見つづけた。

やっと大海は大またで歩きだした。

だが、橋をわたって江ノ島に足を一步踏みいれると、すぐに一軒の民宿にはいつてしまった。

「弱ったなあ、花ちゃん、観光シーズンでもないのに、おれたちもあの民宿に泊まったら、やつにかんづかれてしまうな」

「しかたありませんね、あの向かいの旅館にしましょう。  
部屋を指定すれば、民宿の玄関や大海の部屋も、のぞけるでしょうから」  
「夏だったら余計に難儀だったろうな」

五日、午後九時。

舟木英介は、〈かわらや〉の一室で、かいまき蒲団にくるまり、ボディガードの前金二百万円を抱きかかえている。

京都府警に報告をしてもどった舟木は、再び高熱を発し、待ち構えていた木下弁太郎との打ち合わせもそこそこに、横になったのだった。

ゆめうつつのなかでも、聴覚が敏感になっている舟木には、部屋の外での、おかみと木下弁太郎のひそひそ話がきこえる。

「木下はん、無茶でござりますよ。

あの体でボディガードやて」

「おかみ、心配はいらんよ。

舟木君ならかならずやってくれる、責任を果たしてくれる」

「責任、といいはりますと」

「松本玄信先生のかわりに、死んでもらうことだよ。

舟木君の役目は、暴漢を捕まえることではないから、体がうごかなくても問題はない、どころか、そのほうが好都合かもしれん。

いざというとき、逃げだされると困るからね」

「木下はんは、おそろしいことをいいなはる。

舟木はんの命を五百万円で買ったということですか」

「人聞きのわるいことをいうものではない。

明日の十時から正午までの、たったの二時間だ。

万が一、無事でランチを食べることができたら、舟木君は特上のステーキを十枚たいらげ、極上の祇園芸者を十人抱くことになるんだ、しかも真っ昼間から」

「そんな人やおへん。

万が一でござりますか、助かる見込みは」

「我が先生は、百万の味方がいる、と同時に百万の敵がいるからな。

とうぜん、ぶっそうなやつは五万といる」

「防弾チョッキとか、鉄仮面とか、あらしまへんのか」

「おかみは面白いことをいう。

舟木君はそんな人ではないのでしょう。

万が一、舟木君が犠牲になったら、先生の肝いりで大霊祭が催される。

偉大なる死の哀悼が、すなわち敵の壊滅につながるのさ。

青写真はすべてできあがっているのだ」

「舟木はんにお話します、この仕事はやめなはれと」

「さしでがましいことはしないが賢明だ。

尤も、舟木君は仮に重病だとしても、断らないよ。

そういう不幸な性格の人間だとして、先生のお声がかりでお願いしているのだから」

「先生様は、鬼か蛇か」

「その両方だ。

しかも、神でも仏でもある」

これらふたりの会話の、どこまでが夢で、どこからが現実なのか、舟木には判然としなかった。

五日、午後十時。

山風順一と花井健太は、部屋の灯りを消し、ガラス窓を細くあけ、(松本大海がはいった) 民宿を見張っている。

「山さん、寒いですね」

「泣き言はいわない」

「泣き言をいいたいの、山さんじゃありませんか。

煙草をすえないのはきついでしょ」

応えずに山風刑事は、手探りで押入から掛け蒲団を引っ張りだした。

「花ちゃん、これをかけろ、先は長そうだぞ。

運良く民宿の二階の灯りはひとつしかない。

あそこが大海の部屋だな」

「民宿のあるじに、ひとこといっておいたほうがよくはありませんか」

花井刑事はいいながら、あくびをした。

「あくびはしない。

花ちゃんはまだ知らないだろうが、あくびってやつは、どういうわけか気づかれやすいんだ」

花井はとぼけた声で、

「そのう、あるじに、客がでかけるようだったら、すぐにしらせろって」

「それも手だが、大海はいまのところなにもしていない、犯罪者でも容疑者でもないんだ。

それに、今夜はうごかないだろう。

でなければ、民宿に泊まったりはしない」

「たとえばの話ですよ、民宿のあるじが、大海のねらう相手だったりして。

すくなくとも、大海は民宿のあるじに用があったのでは。

なぜって、民宿というものは、こんな季節はずれには、閉じているものでしょうからね」

「可能性はなきにしもあらずかな。

いずれにしても一晩明ければ答がでるはずだ。

おれたちは仕かけることはない、ひたすら待つのみさ」

「それじゃ、退屈しのぎに、さきほどの話をしてくれませんか。

マグレ氏と不気味で謎だらけの事件の話」

花井は、あくびをこらえた。

「眠気ざましに話すとするか。

さて、どこから話したもんか。

事前にいっておくが、おれは管轄ではなかったから、噂話としてきいてくれよ」

「噂ほど面白いものはありませんからね」

花井の眠気は、もうさめていた。

「この発端は、一九六〇年の、ある事件だった。

大阪府内で或るアパートが大爆発した」

「むむ、爆弾魔藤上吾郎のしわざでは」

「ない。

そのころ藤上は小学校にはいったばかりだ。

そのアパートと両隣の民家が全焼、怪我人は多数でたが、死亡者はひとりのみ、若い女性だ。

いや本当はそれすらもわからない、遺体はこなごななんだからね。

それでもアパートの住人への聞き取り調査から、若い女性ということがかたまった。

ところが、その女性には、かなり年上の内縁の夫がいたというのだが、本人からの連絡はない。

それで、内縁の夫は行方不明ということになった」

「その内縁の夫というのが、荒野大三郎という人物なのですね」

「当たり前。



花ちゃん、冴えてるね。

そしてもうひとつ、その死んだ女性の、たったひとりの身内が、実兄の麻暮正作氏なんだ」

「わかりました、マグレ氏は、荒野氏をホシだとおもいこんで、復讐のために立ちあがったんですね」

「まあまあ、そこまで行くのは早すぎる。

大阪府警も、荒野氏がクサイとにらんだ。

荒野氏が内縁の妻を殺し、証拠隠滅のために爆弾を仕かけたのではないかとね。

もしくは、爆弾によって内縁の妻を殺した」

「被疑者の荒野氏が姿を隠したとなると、僕でもそうかんがえてしまいますね。

それで、荒野氏と内縁の妻のあいだに、こどもはいなかったんですか」

「花ちゃんは、どうしても荒野大三郎と松本大海を、むすびつけないようだね。

幸か不幸か、こどもはいなかった。

しかしね、花ちゃんの推理も一理あるんだ。

なにせ【大】の字が同じだから。

というのは、荒野大三郎氏の父親が、大造氏といってね、やはり【大】がつく。

たしか墓守だったはず。

麻暮正作氏はその後ずっと命をねらわれたが、大造氏が張本人だったという説もある」

「大造、大三郎、大海、ですか。

たんなる【大】つながりではなさそうですね」

「そうかんじる理由は他にもある。

大三郎氏も麻暮氏も、とても小柄でね。

でも大三郎氏の内縁の妻であり、麻暮氏の妹であるその女性は、たいへんな大柄だったらしい。

アパートの住人は、大三郎氏と内縁の妻がそろって出かけるのを見て、ゴリラが小猿を連れていくと喩えたらしい。

話半分としても、あのプロレスラーみたいな大海が、産まれる確率は半分はあるからね」

「わけがあって、大海は大造にあずけられていた、ということもかんがえられますね」

「うむ、それが真実だとすると、松本玄信は北山極齋であり日下典禪であり、荒野大三郎だということになってしまう」

山風は闇の中で、頭髪をかきむしった。

「それで、事件というのは、それだけ」

「ではないんだ。

だから不気味で謎だらけと行ったわけだ。

その後やはり、アパートの爆発事件がつづげざまに三件あって、もちろん死者もでた」

「つごう四件ですね」

「その四件の爆発がね、専門家にいわせると、同じ種類の爆弾だというんだ」

「他の三件も、大阪ですか」

「ちがう、札幌、仙台、そして岡山」

「土地つながりはなさそうですね。

ただ、大海の出身が岡山」

「もし同一犯人だとしたら、ホシにとってはつながりがあるのかもしれない」

「アガサ・クリスティの小説にありますね。

ひとつの事件をカムフラージュするために、他のいくつかの事件をおこす」

『ABC殺人事件』か。

ところで余談だが、或る日、麻暮正作氏が東京の警視庁にやってきたというんだ」

「あのかっこうで」

「そうそう、そのときたまたま、ひとりの婦警がカメラを持っていた。

その婦警ったら、ホンモノのチャップリンが警視庁の見学にやってきたんだと本気でおもいこんじゃって、パチリさ。

じつはおれはその写真を見たことがあるだけなのさ」

「そうでしたか」

「麻暮氏は、言葉はわるいが、当時の警視総監と懇意というか腐れ縁というか、なにか弱みもにぎっているとかで、遠慮なく堂々とはいつてきた。

むろんミヤゲつきでね」

「土産ですか」

「情報だよ。

麻暮氏いわく、沖縄に【D】とよばれる秘密工場があって、そこでは【D爆弾】なるものも製造されていると」

「その【D爆弾】が、四件の事件でつかわれた」

「そうなんだが、それだけではない、いやそこまではよかったんだ。

警察としても、麻暮氏の情報を信用しそうになったんだから。

ところがこのとき、麻暮氏はこういった。

その【D】とは、花ちゃんはどうおもうかい」

「D、D、DEATHの【D】ですか」

「まあそんなとこだよな。

だが麻暮氏は、大三郎の【D】だというんだ。

しかも【D】は日本転覆を計画していると」

「かなり強引ですね」

「警察のだれもがそうおもった。

それでも調査は開始され、沖縄に多くの刑事が派遣されたが、【D】は見つからなかった」

「そうなんですか、それで警察は【D】から手を引き、麻暮氏が単独で調査を続行したのですね」

「だが、おれだったら麻暮氏の説を信じたかもしれないな」

「それはなぜですか」

「なぜってさ、大三郎氏は、カムフラージュだったかもしれないが、いちおう麻暮氏の妹の内縁の夫だよ。

麻暮氏が妹を通じて、大三郎氏がどんな人間かは、しっていたはずじゃないのか。

穿った見方をすれば、麻暮氏は、はるか以前から大三郎氏を疑っていて、それで妹をスパイとして送りこんだのかもしれない。

それが人身御供となってしまった」

「マグレさんというのは、いまきただけでも、それくらいのことにはしそうな探偵ですよ」

「そうなんだ、だから勝手な推測をしてしまう。

この事件は通称〈D事件〉とよばれているが、一般のひとにはなにもわからなかっただろう。

警察に対しておおきな政治力がはたらいたようで、うやむやになった」

「けっきょくマグレさんは、沖縄で【D】のありかを、つきとめるのですか」

「そうなんだが、なにせうやむやだから、あとは警察内での伝承みたいなもんでさ。

私立探偵麻暮正作氏は、独力で【D】を探しあて、単身で【D】に乗りこみ、見事に【D】を破壊した。

その際、麻暮氏は荒野大三郎氏と凄まじい格闘になり、共に果てた。

そのはずが、麻暮氏は命からがらバりに逃げたとされる。

だが何年か経って、麻暮氏の家族は何者かに殺され、麻暮氏も瀕死の重傷を負う。

麻暮氏は、大三郎氏がじつは生きているのだと信じ、これらも大三郎氏のしわざだとかんがえた」

「それでいまもマグレ氏は、【D】つまり大三郎氏をねらっているんですね。

たんに復讐なんて言葉ではかたづけられない、おそるべき執念ですね」

「その筋道がたしかなら、さっき江ノ電でたまたま見かけた男は、やはり麻暮氏なのだろう。

となると、どういうことだ。

まず麻暮氏が、鎌倉や湘南に遊びにきたとはかんがえにくい。

長谷の大仏を拝観するには、ちとおそい時間だ」

「では、マグレ氏は【D】を探索して、ここまで。

すると、大三郎氏はやはり生きていて、しかもこのあたりにいるというわけですね」

「となるとだよ、花ちゃん、これはちと、なんだぞ。

目的はちがっても、麻暮氏と大海の目指す相手は、同じってこともあるぜ」

「荒野大三郎」

花井はいささか興奮して、その名を声にした。

「うむ、しかし、おれの推理は、はずれっぱなしだからな。

あんがい大海は恋人に逢いにきただけかもしれないし、江ノ電で見かけたのが麻暮氏本人だったにしても、鎌倉彫でも買いにきただけかもしれない。

明日になれば、おれたちの推理が当たったか外れたかわかる」

「明日が待ちどおしい気分になってきました」

花井の声が、こころなしか弾んだので、山風はすこし嬉しくなった。

「なあ花ちゃんよ、この事件が片づいたら、久しぶりにおれの家にこないか、ゆっくり飲もう。

じつはね、老妻がさ、花ちゃんだったら娘を嫁にやってもいいなんて、ぬかしてやがるんだ」

「あれ、山さんに娘さんなんかいましたっけ」

「とぼけるんじゃないよ、おれの目を盗んで、おれの娘とデートしている軽薄男を、おれは逮捕してやろうかとおもったくらいだぞ」

「バレバレですか、申しわけありません」

「ベテラン刑事を甘く見るなよ。

まあいいってことよ、花ちゃんが真面目な男だってことは、おれがいちばんよく知っている。

それでも娘だけは、刑事の嫁にしたいくはなかったな」

「過去形でいわないでください、おとうさん」

花井の言い方に、山風は声をおしころして愉しそうに笑った。  
「おれはさ、花ちゃん、このごろよくかんがえるんだ。 ずっとおれは天職だ  
とおもっていたけれど、警察なんてものが要らない世の中がこないもんかって  
ね。

歳かな」

「山さんは、危険な難事件にばかり首を突っこんできましたから。

それに較べれば僕なんか、サラリーマンより呑気にやらせてもらっています」

「それならおれに約束してくれ。

絶対に殉職なんかしないってな」

「僕はこれでも、意外に逃げ足はやいですから」

「そろそろ交代で眠るか、睡眠不足だと逃げ足が鈍るからな」

「足より頭が鈍るんです」

二月六日、午前七時。

舟木英介はすでに起きている。

寝汗まみれの顔をあらい、無精髭をそり、乱れた髪をととのえた。

下着を真新しいものに替え、ワイシャツを着てネクタイをしめた。

木下弁太郎が持参した(胸にSPバッジのついた)ベスト付きスーツを着た。

防弾チョッキも鉄仮面もなかったが、熱はまだあった。

舟木が玄関にむかうと、おかみが目ざとく見つけて、

「舟木はん、見ちがえましたなあ、ええ男っぷりどすえ」

と微妙な表情をしていった。

またなにかいいかけそうなおかみに、舟木は部屋の金庫の鍵をわたし、

「ぼくに万一のことがあったら、この金で後始末をよろしく頼みます」

と静かにいって、丁重に一礼した。

六日、午前七時半。

山風順一は民宿の玄関を見張り、花井健太は仮眠をとっている。

「おい、花ちゃん、起きろ」

山風刑事のささやき声に、花井刑事はすばやく身をおこした。

「やっこさん、うごきだしましたか」

「いよいよだ」

山風は蒲団をたたんで押入にしまった。

ふたりはそろって部屋をでた。

民宿をでた松本大海は、江ノ島の奥へは進まず、ためらいもなく元の道を引きかえした。

「おかしいですね。ここまで来た意味がわかりません」

花井がつぶやいた途端、大海は橋のうえで急に立ちどまって振りかえった。

「しまった」

と山風はおもわず口ばししたが、大海の視線の先は、はるか上はるか遠くにあった。

「なにを見ているんでしょうね」

花井も大海の視線の先を眺めた。

「おそらく灯台だろう」

「でも、あの位置からは見えないはずですよ」

「そうか、それにしてもクサイな。

江ノ島になにかがある、あるいはだれかがいる」

「かんづかれるといけませんから、このまま大海を追いこしましょう」

花井の言葉を合図に、ふたりの刑事はそのまま歩きつづけた。

そして橋の中央で、海面を眺めるふりをして、横目で大海の姿を確認した。

大海はまだ立ちつくしていた。

潮の香が妙につよく、空は不気味なくらい青かった。

「なにかがある、だれかがいる」

ふたたび山風がつぶやくと、

「ちっぽけで平和な島に見えますけど」

花井はあくびをかみころしていった。

「日本そのものがちっぽけで平和な島のはずだ。

しかし現実はそうではない」

大海がうごきだした。

やはり島の方角ではなく、こちらにむかっている。

「どうします、山さん」

花井が山風に指示をうながした。

「よし、分担しよう、花ちゃんは江ノ島の奥を探ってくれ。

民宿に取材し、灯台にのぼり、植物園をのぞき、あれこれ聞き込みもする。

おれは大海を尾行する。

正午にこの橋でまた落ちあおう」

「了解です。

でもひとりでは危険じゃありませんか」

「相手はまだ凶悪犯ではない。

お、くるくる、じゃあ頼むぞ。

もし江ノ島でなにか発見できたら、麻布署の兄貴に連絡してやってくれ」

「了解です。

はやく山さんのお宅で一杯やりたいものです」

「嬉しいことをいってくれるじゃないか」

「とにかく気をつけてください」

「尾行される身になったら厭だろうな。

おれたちは因果な商売だよ。

おそらく必要悪だな」

この言葉を最後に、山風順一刑事は、松本大海と共に、消息を絶つのだ。

(二週間後、ふたつの遺体が、七里ヶ浜の海岸にうちあげられているのを、地元住民が発見した。

警察は、山風順一と松本大海であることを確認した。

外傷がないことから、大海が入水自殺するのを、山風が助けに入って溺れたと断定した。

このときの花井健太の嘆きはハンパではなく、山風刑事は大海に無理心中させられたのだと、いいはって譲らなかった。

山風順一の一周忌が済んだあと、花井健太は山風の一人娘と結婚、希望して入り婿という形をとり、山風健太となった)